
Kらぼ

槇原勇一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Kらぼ

【Nコード】

N42980

【作者名】

槇原勇一郎

【あらすじ】

恋愛感情もプログラミングできたらいいのに……。北海道にある北都学院大学には文系の情報学部があった。そこには学生だけで運営される『学生独立研究室』、通称『クラボ』と言われる部屋がある。トラブルメーカーの創立者に迷惑しながら、研究に、恋愛に、アルバイトに、ドタバタのキャンパスライフを謳歌する直人君のお話です。

嵐を呼ぶ男 その1

「おっはようっ！なおっ！またライフゲーム？相変わらず暗いわねえ・・・」

円は、いつもの調子で話しかけてきた。大声でおはようを言うような時間ではない。

もう、二講目の時間だ。一講目に必修の語学があるのに、二講目には取るべき講義がない。

大学の時間割というのは学生にとっては不親切なものだ。

「円ちゃん、暗いは言いすぎだよ。せめて根暗って言ってあげないと」

「余計にひどいと思うが・・・」

やたらとのんびりとした、正直、二十歳になったとは思えない幼い口調で円に話しかけたのは、綾原奈緒。

俺、奈緒、円は三人とも同じ高校からこの大学に進学してきた。

特に奈緒は幼稚園からの幼なじみだ。

俺の名前は新橋直人。この前二十歳になったばかりだ。

奈緒と円と同じ北都学院大学情報学部人間情報学科の二年目。

今いるのは大学の情報学部が主に使っているC館と言われる建物の一室だ。

『学生独立研究室』

この研究室を作った昔の学生の頭文字を取って通称『Kラボ』と呼

ばれている。

北都学院は札幌の隣、美日幌市みかほろにある文系の大学で、最近最近は珍しいが、文系の情報学部がある。

聞いたところによると、国公立などの理工系の情報工学部などでは、教授ごとに学生が所属する研究室があるみたいだけど、この大学にはそんなものはない。

研究室というのは、教員のための個室だ。ゼミに所属しても研究室に席が貰えるわけじゃない。

中にはゼミ生に自分の研究室を開放する先生もいるが、大した広さじゃないので、やる気のあるやつ何人かが入り浸る程度だ。

そこで、数年前、ある学生がどういう方法でかは分からないが、教授と事務を説得して、空いていた研究室を有志の学生を集めて使えるようにしたのがこの部屋だ。

そのかわり、この部屋に集まった学生は、時折、先生の研究や、パソコン教室のメンテナンス作業なんかを手伝わされることがあったり、二年生は何らかの形で研究発表する義務を負っている。

大学でちゃんと自分たちの居場所があるというのはいいものだ。サークルなどに所属しない限り、どこかに荷物をおいて講義に出かけることも難しい。

空き時間がある場合は、暇つぶしの種に困ることにもなる。

特に人ごみが嫌いな俺にはこの研究室は極めてありがたかった。

「そつだっ！なおちゃん！」

「ん？」

俺と奈緒は二人同時に円を見た。

「あ、いや、あんたにちゃん付けして呼ぶかつ！直人じゃなくて奈緒のことっ！」

俺は赤面した。いつものことなんだが、俺だけの知り合いは俺のことを『なお』と呼ぶことがある。

奈緒のことも知っていれば『なおと』と呼ぶのだが、『なお』と呼ばれれば反応はしてしまう。

円は両方との付き合いが長いが、面白がって二人共いるところ『なお』と呼ぶ。

が、今回は悪意はないようだ。

しのつかまどか
篠塚円は、この研究室に出入する以外にも、テニス部に所属していてスポーツ万能。

身長も164センチあり、俺とそんなに変わらない。

さばさばした性格で、男にも女にも人気がある。顔も結構美人だ。

「そろそろお昼にいこうよ。せっかく二講目が休みなんだから、混み始める前に」

「あ、私は今日はお弁当作ってきたから・・・」

「あ、そう・・・」

奈緒は結構家庭的で料理は得意だ。

俺たち三人とも一人暮らしだが、一番まともな食生活を出来ているのは奈緒だろう。

時々円と二人で飯の世話になることもある。

「直人は？」

「俺は金欠だ。買い置きのカップ麺を消費させてもらう」

研究室には『カップ麺ボックス』と書かれた段ボール箱が置いてある。

何かの罰ゲームやルールを破った者へのペナルティとして、決まった金額分のカップ麺を買ってきてそこにに入れて置くことになっている。

こればかり食べていると、それ自体がルール違反なので結局自分で買ってくることになるのだが、それは金のある時でいい。今は背に腹は変えられない状況なのだ。

「もうちょっとまとまな食生活を考えたら？学食に行こうよ・・・」

「おごつてくれるなら」

「私もカップ麺で我慢するか・・・」

円は諦めたらしい。円は料理はからきし。米の炊き方するら怪しいのだ。

付き合いの長い三人がたまたまおなじ大学に行くことになったので、親たちはわざわざ三人を同じアパートに部屋を見つけて住ませた。

三人一緒なら遠方での一人暮らしの心配も少しは軽くなると思っていたが、女二人はともかくそこに男一人がいるのは、別の心配が

出てくるんじゃないかと言ったことがある。

「奈緒ちゃんになんかしたら、円ちゃんがあんたをボコボコにするでしょうねえ。円ちゃんをあんながどうこうできるわけもないし」

というのが母親の返答で、二人の母親もやたらと頷いていた。

「それ以前に、そんな度胸が直人くんにあるとは思えないわ」

奈緒の母親が言う。奈緒同様、子供のころからずっと俺を見ているのでよく知っているのだ。

「間違いがあつてからじゃ遅いんですよ……」

せめてもの反撃のつもりだったのだが……

「その時は、ちゃんと責任取ってもらいますから。ご自由に」

畏か……これは畏なのか……

そんなわけで、最初の一年は結構共同生活みたいな感じだった。食事も当番制みたいにして、毎晩一緒に食べていた。

そうは言っても、忙しい大学生活。それぞれに履修した講義の違いやアルバイトで時間がずれてくるから、今では週末にたまに声を掛け合つて、一緒に食べる程度だ。

ただし、一年目の年末あたりから、この研究室に三人とも通うようになってまた少し違ってきた。

アパートで顔を合わせることは少なくなったが、研究室で毎日のよ

うに顔を合わせるようになったからだ。

奈緒だけが弁当を広げ、俺と円は電気ポットからカップにお湯を注いだ。

「ちょっと多めに作っちゃったから、二人におかずを分けてあげるね」

「ああ・・・奈緒はやさしいわあ・・・直人は学食にも付き合ってくれないというのに・・・」

「金の切れ目が縁の切れ目って知ってるか？」

他愛のない話をしながらの食事は楽しい。いつものことだが、こういう日々がいつまでも続かないということはなんとなく分かっていた。だからといって、今を楽しまないのは損というものだろう。

「ぬぬっ！相変わらず両手に花だな！」

「おはようっ！って、もうお昼だけど。語学自主休講はまずいでしょ。お昼ごはんは？」

「これから学食に行くつもりだったけど・・・円は直人と一緒にカップ麺かよ」

ドアから入ってきたのは東原順平^{ひがしはらじゅんへい}。

一留しているので歳は一つ上だが、大学では実年齢よりも学籍の先輩後輩の方が重視されるので二年生同士はタメ口だ。

学部も情報学部のもう一つの学科、情報システム学科だが一、二年目の語学と教養、基礎科目では一緒になることは多い。円は語学のクラスが一緒だ。

「あら、じゃあ、待ってればよかった。直人が力ネないっていうか、一人で行くのもなんなんで……」

「ふーん。じゃあ、俺もたまにはカップ麺で済ますかな」

順平は一人暮らしたが、予備校時代から時給の良いアルバイトをしているらしく、羽振りはいい。

なぜか何のバイトなのかは教えてくれないが、気分のいい時は昼飯をおごってくれるので余計なことは聞かないことにしている。

順平がカップ麺にお湯を注ぎ始めると、またドアが開いた。

「相変わらず四人は仲がいいねえ。二年になってもいつも一緒か」

「四人のうち三名がカップ麺というのも……仲良く生活習慣病まっしぐらかしら?」

「先輩……一応女子もいるんで、多少は手加減いただけると……」

「女の子ならかわいいお弁当ぐらい作ってこないと。奈緒ちゃんみたいだね」

「んぐっ……」

最初に声を掛けてきたのは、今のこの部屋のリーダーである室長の神林雅也先輩。

人間情報学科三年。

文系の情報系という中途半端なIT系大学にしながら、注目の天才学生プログラマだ。

親の仕送りもなしに、在宅のプログラマとして金を稼いで生活している。

あとから入ってきて、円に絡んだのは北川純菜先輩。

人間情報学科三年。通称姉御。

一年浪人していて、少し気にしているらしい。年齢のことは禁句。良く気が利く姉御肌で、俺達は『姐さん』と呼んでいる。

「先輩方はご飯は？」

「学食で済ませてきた。ところで、今日は五講目は入ってないよな？」

「ないですっ！」

元気よく答えたのは円。全員の時間割を把握していたりするから、彼女がそういえば全員問題しなとなる。

「じゃあ、五講目の時間にちょっと相談があるんで、みんなここにいてくれ」

「あ、俺、六時からバイトがあるんで、五時半にはいなくなりますけど？」

神林先輩にそう言ったのは順平だ。順平は忙しい二年目にして、毎日のようにバイトを入れている。

講義のある時間は避けているが、深夜のアルバイトが多いので、寝坊で一年目の単位はだいぶ落としていた。

「そんなにかからないから大丈夫だ。あ、でも、時間があるやつはその後呑みに行くぞ」

「せ、先輩・・・俺、今金欠なんですけど・・・」

昼飯もカップ麺で済ませている状態なのだ。

「ああ、金のことは心配なくていい。今日はおごりだ」

「先輩のですか？」

「いや、まあ、スポンサーは他にいるから心配するな・・・」
「？」

先輩は在宅の仕事でだいぶ余裕があるのは知っている。だが、今日の飲み代は別らしい。

「まあ、その時になればわかるさ、な？」

「そ、そうね・・・きつとあんたたちの懐じゃいけない店につれて
つてくれるわよ。ふふふ・・・」

「・・・はあ・・・」

何処か腑に落ちないが、とりあえず、タダ酒とタダ飯にありつけるなら余計なことは言わないでおこう。

「さ、そろそろ行かないと三講目に遅刻するわよっ！まだ、4月とは言え、欠席がかさむとあとから苦しくなるんだからっ！」

俺達は慌てて食事を終えて、講義室に向かった。

「スポンサーって誰なのかなあ・・・」

「って言うか、そもそも相談の内容が心配ね。その辺に謎の答えがありそう・・・」

「ただより高いものはないっていうからな。まあ、俺はいけないが」

奈緒と円はなにやらそわそわしている。それは俺と順平も同様だった。

北川先輩も神林先輩も決して意地悪な人ではない。

だが、特に神林先輩は人が良すぎて、教授たちから無理難題を押し付けられ、結果的に俺達が苦勞することがある。

この研究室に来てから何度かそういう目にあって、こづいづい事があると不安になるのだ。

「よつす！久しぶりっ！みんな元気かあ？」

「しつかり勉強していますかあ？ここは勉強するための部屋なんだから遊んではかりじゃだめすよお」

そう言うては行ってきた二人組は神林先輩と北川先輩ではなかった。

すでにこの研究室から引退したことになっている四年の島先輩と今野先輩だ。

島聖史。しませいし二十二歳。人間情報学科四年。先代の学生独立研究室長だ。

二年のころから地元のゲーム会社でアルバイトをしていて、その会社に就職することがすでに決まっている。

順調に単位を取っていけば、卒業研究以外は履修する必要がなくなるので、今は殆ど毎日アルバイトに明け暮れているらしい。

だから、何かない限りこの部屋に来ることは珍しいのだ。

女性の方は今野詩織。いまのしおり二十二歳。情報システム学科四年。実は島先輩の彼女だ。

二人はこの研究室で出会って付き合い始め、三年目からは同棲している。実は親も公認らしい。

離れ離れにならないために、地元企業に絞っているせいで、就職活

動は苦戦中。

島先輩の稼ぎがいたために、就職できなければ即永久就職でいいと思っっている点、

それほど必死ではないのかもしれない。

「お久しぶりですね。先輩。でも、先輩方までわざわざ来るってどういいう話なんでしょうか？」

「なんだ、聞いてないの？」

「ええ、全然」

四年の先輩二人は、びつくりした顔をしている。

「ふむ・・・雅也も純菜も何も言わなかったんなら、俺達が教えるわけにもいかんな・・・」

「うーん・・・予備知識を与えないで会わせるのはどうかしら・・・」

おっとりとした今野先輩の声に不吉な予感が漂う。

次の瞬間、勢い良くドアが開いた。

「じゃじゃーんっ！よくぞ集まった我が優秀なる後輩たちよっ！君たちこそ私の志を受け継ぐ者たちだっ！」

「????？」

二年の四人全員が目が点になった。

そこに現れたのは、派手にспанコールが散りばめられたスーツを着た二十代半ばと思しき男だ。

それが、ドアを開けた瞬間、勢い良く三回ほどバク転をして、打ち合わせ用の会議机に飛び乗ってこう言ったのだ。

島先輩と今野先輩は額に手を当ててため息を付いている。
開いたドアの向かい側では、神林先輩と北川先輩がやはり額に手を
当ててため息を付いていた。

誰なんだ・・・この人・・・

嵐を呼ぶ男 その1（後書き）

第一話を読んでいただきありがとうございます。

今回はほとんど登場人物の紹介みたいな感じになってしまいました。

学園モノを書きたいと思ったのですが、どうも高校生だとリアルなことを思い出せない。

大学生活なら十年前とは言えまだ思い出せるということので、

大学時代の自分のいた環境をモデルに考えてみました。

プロットでは結構たくさんキャラクターが出てきます。

最近読んだこのサイトの別の作家さんの作品の影響を強く受けそうですが、

私の学生時代の経験も反映して、オリジナルな作品にしていければと考えています。

あと、こついつあとがきは、今後はあんまり書かないようにしたいですね。

前書きも後書きも楽しんでいただけるように頑張りたいと思います。

嵐を呼ぶ男 その2 (前書き)

〜前回までのあらすじ〜

Kらぼに現れたのはやたらとテンションが高い変人だった！
彼は一体何者なのか？！敵か味方かただの変態か？！
直人達二年の運命やいかに？！

嵐を呼ぶ男 その2

「……ええと……どこのどちら様なんでしょう？この人？」

あっけに取られる四名を代表して俺が当然の疑問を口にした。

どうやら今日の集まりはこの人を紹介するためだというのはわかる。分かるが……出来れば関わりたくない感じだ。

「こちらは、この学生独立研究室を作った我々の先輩。小比類巻要こひるいまきかなめさんだ」

研究室のドアから入ってきた神林先輩が頭を掻きながら言う。

「そのとおりだっ！教授のセクハラや事務職員の横領を種に脅してこの部屋を用意させたっ！」

いや、それってシャレになんないんじゃない？

「ええと……すでに、とりあえず、変人だということは一目瞭然なんでわかると思うんだけど、すごい人ではあるんだよ」

「そうであるっ！私はすごい人なのだっ！尊敬したまえっ！」

「人格的な影響だけは受けられないように気をつけてください」

「言われなくても、それだけは避けたいです。で、何がすごいんですか？」

結構ひどいことを北川先輩に言われながら、小比類巻要という男は全く動じていない。

都合の悪い言葉は耳に入らない体質のようだ。机の上で両手を腰に置きながら旨を張って立っている。

「脅しの話は、、まあ、真実かどうかは別にして、この研究室を確保して有志の学生に開放させたのは間違いなくこの人の力なのよ」
「はぁ……」

「それだけでなく、先輩はこの部屋で自力で研究した画期的なシステムを世に送り出したの。在学中に起業して今はIT会社の社長。新進気鋭の若手実業家としてちょっとした有名人なのよ」

「画期的なシステムってどんな物を作ったんですか？」

突然、態度が変わったのは円だった。円はぶつちやけ金に汚い。金持ちが大好きだ。

実は今の時点で興味があるのはシステムの内容じゃなくて、小比類巻という男の年収だろう。

「サポロイドって知ってる？」

「ええ、確か人間の代わりにクレームとかサポートの電話を受けて対応してくれる、しゃべる人工知能プログラムですよ？特定分野の相談事であれば、人間同様に会話ができるって言う。システム事例研究の講義にできました」

「この前もニュースにでてたよ。たしか、そのプログラムのお陰でコールセンターが不要になって、失業率が上昇したとか……」

俺に言葉を続けたのは奈緒。意外と社会派なのだ。

欠かさずニュースをチェックしているのは彼女ぐらいだろう。俺たち四人では。

「そうそう。それを作ったのが小比類巻先輩よ」

「ええっ!？」

そりゃ巨万の富を得ていることは間違いない。

サポートの世界に革命を起こした画期的なシステムで、わずか数年の間に一気に普及したものだ。

サポロイドの開発者なら間違いなく『スゴイ人』だ。

「で、その偉大なる大先輩、小比類巻さんは今日はどういう理由でここにお越しになったのですか？後輩を見に来ただけ？」

意外と冷静なのは順平。むしろ、若干機嫌が悪い。

先輩に対して態度がなってないと思うが、何が気に入らないのか……。

「それは……」

「北川君。それは私から説明しようっ！」

北川先輩がびつくとする。この姐さんをここまで脅かす人を初めて見た。

今野先輩や島先輩だって、北川先輩には逆らえないのに……。

「その前に……みんな座りませんか？」

そう言ったのは今野先輩。場の空気を読んでるんだか読んでないんだかは分からないが、

先輩の間延びした声を聞くと、妙に落ち着いた気持ちになる。

「あ、私、紅茶を入れますね。アールグレイを買っておきましたから」

「あら、奈緒ちゃん。気がきくわね」

「そんなことないですよ」

照れながら奈緒はティーポットを戸棚に取りに行く。

とりあえずは、この間のお陰で混乱した頭を落ち着けることができそうだ。

「さ、サポロイドの開発者・・・新進気鋭の若手起業家・・・これは・・・これは・・・」

どうやら落ち着いてない人がいるようだ。

「・・・間違いなく・・・お金持ち・・・でも・・・変・・・変態だけど・・・お金持ち・・・」

守銭奴の円はブツブツ何かを口走っている。品性の欠片もない気がするなあ・・・。

「・・・」

順平は相変わらず不機嫌な顔をしている。大先輩前にこれはまずいだろう・・・。

この二人の社会性なさは心配だ。アルバイトとかでは大丈夫なんだろうか？

研究室の中に紅茶のいい香りが漂う。みんな結構紅茶好きなのだ。

全員が会議卓に座ると少しだけ狭い。一番奥のいわゆるお誕生日席に小比類巻さん。

向かって左側に今野先輩、北川先輩、円、奈緒の順。右側には島先輩、神林先輩、順平、俺。

なぜか席順は小比類巻さんが指定してきた。

「さて、私がおここに来た理由だが・・・ああ、その前に二年は初対面だな。自己紹介してくれないか？」

「は、はいっ！わ、私からっ！」

円が興奮を押しきれない様子で手を上げる。

変人であることはともかくとして、金持ちだから仲良くなっておこうと言う方針にしたらしい。

「うむ。元気がいいのうっ！君からだっ！」

「は、はい！篠塚円っ！二十歳！人間情報学科ですっ！しゅ、趣味は・・・」

「ああ、名前だけでいいよ」

「・・・」

興奮し過ぎの円を沈めたのは島先輩だった。これもいつもの風景。島先輩はとにかく冷静というか冷めている人だ。馬鹿騒ぎも一切しない。

「え、ええと・・・あ、彩原奈緒です。私も人間情報学科です」

奈緒は緊張しすぎだ。基本的に人見知りをするので、自己紹介はいつもこんな感じだ。

こいつもこいつで、社会に出て大丈夫かと思う。

「東山順平。情シス」

学科名を省略した上に、丁寧語すら使わなかった。だが、先輩方はこういふ事にはうるさくない。

小比類巻さんも気にしていないようだ。まったくハラハラさせる・・・

・が、俺の番だ。

「新橋直人です。人間情報学科です」

普通に、自己紹介はあくまで普通に普通のテンションだ。それが一番印象が良い。

インパクト勝負に出てもいいことなんてそうそうないのだ。

「なるほど。よし、名前は覚えたぞ」

「で、肝心の今日いらした理由というのは？」

他の三人にはなんか任せておけない気がしたので、代表して質問することにした。

「ふむ、実を言うと毎年この時期に必ず研究室に顔を出すようにしている。それは初代室長としてやらねばならないことがあるからだ」ということは去年もいらしたんですか？」

「そういうことだ。この研究室に一年が入ってくるのは夏休み後だから、主に目当ては二年生ということになる」

目当て・・・？なんだか腑に落ちないんだが・・・

「ええと、簡単にいうところは学生だけの研究室。だから、研究テーマを決めて二年のうちに論文を纏めて、学内発表する義務を負っているんだ。四年目は本来必修じゃない卒業研究を必ずやる必要があるし、三年目はその準備がある」

「ええ。まあ、それはやらないとなあと思っていましたけど・・・」

「小比類巻先輩は毎年二年生の研究テーマを決める手助けをしに来てくれるんだ。学生しかいないし、うちの大学には大学院もないから、誰も二年生のための研究指導なんてできない。だから、小比類

巻先輩が毎年こうやってやってくれているのさ」

意外とまっとうな理由だったんだ。ちなみに毎年三月の卒業研究発表の直前、いうなれば前座としてクラブの二年が研究発表をすることになっている。

去年は神林先輩と北川先輩が発表して、四年の卒研発表にずいぶんとプレッシャーを与えていた。

「昨年のおまさん純菜ちゃんの発表は見に行けなかったがどうだったかね？二年の諸君」

「お二人の出来に、卒研発表を控えた四年生が青ざめてましたね」

「ふむ。それでこそクラブのメンバーというものだっ！君たちにも大いに期待しているぞっ！」

なるほど。だんだんヤル気になってきたぞ……。

「と言って、今この場で決めると言われても無理だろう。まずは、自分が何をやりたいかをゆっくり考えて……ちょうど来週からゴールデンウィークだ。その間に自分なりのテーマを考えてくるようにっ！連休明けに私が直々に相談に乗ってあげようっ！」

「ところで、神林先輩と北川先輩の発表は三月に見ましたけど、島先輩と今野先輩はどんなテーマだったんですか？」

神林先輩は確か進化学習アルゴリズムを応用した自動プログラミングの研究、北川姐さんはプログラミング言語の学習のための教材開発がテーマだった。でも、島先輩と今野先輩が何をやっていたのかは知らない。

「私はですねえ、SQLに変わるリレーショナルデータベースの操作言語についての試作をしましたあ！卒業研究もお、おんなじテー

マで継続してまあすっ」

聞いていて眠くなるような声だけど、なんだかとても難しい話のような……。

「俺は知つての通り、二年のうちからゲーム会社でアルバイトしていたからね。進化アルゴリズムを使った将棋AIプログラムの開発がテーマだ。卒研もやっぱりそれだな。神林の研究も関連しているぞ」

そういえば、神林先輩はいつも島先輩にいろいろ相談していたなあ……。

「そういうことであるっ！二年生の研究発表は義務化されているとは言え単位とは無関係だっ！しかし、今からやっておけば卒業研究には三年分の時間を使えることになるし、ご褒美もあるぞっ！」

「ご褒美ですか？」

おおっ！なにかおいしい話が……

「ああ、例えば俺が在宅でやっている仕事が取れるのも、二年の中間に研究資料を小比類巻先輩が知人の会社に持ち込んで売り込んでくれたからだし、島先輩もアルバイトだけどゲーム会社の時給は目が飛び出すほどの金額になったのは、研究成果を実際場で応用して高い評価を得たからだ」

「今野先輩と北川先輩は？」

「二人共高額の奨励金をゲットしているぞ。純菜は教職狙いだから就職とかの話は関係ないし、詩織さんは……」

「私はあ……さとちゃんと一緒にいる時間が減るのは嫌だからあ、アルバイトの話は断ったんですよあ」

・・・まあ、今野先輩らし言ったららしいんだけど・・・島先輩がなんか苦笑いしているなあ・・・。

「先輩・・・俺、そろそろ行ってもいいですか？アルバイトに遅れるんで」

今年と昨年の研究発表の話題で先輩方が盛り上がっていたところにいきなり順平が声を上げた。
急いでいるのはわかるんだが、そんな不機嫌に言うことないだろうに・・・。

「ん、ああ、そうだったな。もうこんな時間か」

「ほほう・・・東原君はアルバイトか・・・じゃあ、残りのメンバーで飲み会ということだな・・・フフ・・・」

なぜか悪寒が走った。小比類巻先輩の目付きがおかしい・・・
・・・何だ・・・。

さらに順平が俺にアイコンタクトを送ってくる。
目が合うと促すように円と奈緒を見て、もう一度俺を顔を見る。

『ま・か・せ・た・ぞ』

順平の目はそう言っている。一体何を・・・

「はあ、じゃ、失礼します」

こつちが意図を察したと勘違いしたのか、順平はさっさと研究室から出て行った。

ほんと無愛想だな・・・順平・・・。普段は一番明るいやつなのに・・・どうしたんだ・・・。

「ようしっ！あとは飲みながら話をするにすればしっ！皆の衆っ！準備していくぞっ！今日は俺の全おごりだっ！」

会議卓に座ってから幾分おとなしくなっていた小比類巻先輩が、座ったまま椅子ごと一回転して机の上に乗っかり、椅子の上に乗って宣言した。どういふ身体能力しているんだこの人・・・。

「あの・・・小比類巻先輩・・・すみません・・・机の上に土足で上がるのはやめてほしいです・・・食事に使おうテーブルですから・・・」

先輩方がびつくりして奈緒を見た。まさかこの破天荒な大先輩に大人しい奈緒が注意するとは思わなかったのだらう。奈緒は潔癖症なのだ。こういうのを見ていて黙ってられない性格だったりする。

「・・・いや・・・これは・・・失礼・・・しかし、奈緒ちゃんだったかな？君は素晴らしい。そんなところまで気が回るメンバーは今までこの部屋にはいなかったっ！」

いや、常識的に当たり前のことなんだけど、あんたが怖くて誰も言えなかったただけだらうに・・・。

奈緒は俺の部屋があまりに汚かったりすると、キレて暴れることがある。先輩相手にそこまで行かなかったのは幸いと言うものだ。

奈緒にとってではなく俺にとって・・・被害に会うのはいつも俺なんだよな・・・。

「それでは、着いてきたまえっ！急いで準備をするんだっ！」
「はいっ！」

俺達は急いで自分の席を片付けた。何にせよ、タダ飯タダ酒はこ
の上なくありがたい。

嵐を呼ぶ男 その2（後書き）

円「ねえ・・・早くも文章がこむずかしくなってきたくない？」

奈緒「そうかな？まあ、笑いだころはそんなにはないよねえ・・・」

円「ほのぼのというのとも違うし・・・大丈夫かしら？」

ええと・・・大丈夫です。女の子が増えていきますから。

笑いは女の子が取ってくれますから。

円「ところで、なんだか神林先輩と島先輩っておもいつきりキャラかぶってない？」

奈緒「私と今野先輩もかぶっているような気がするよう・・・」

そ、そんなことはありません。そのうち・・・ちゃんと違う味を出していきますから・・・たぶん・・・。

ご意見ご感想、誤字脱字の指摘、ご評価をお待ちしております。拙い文章をお読みいただきありがとうございます。

嵐を呼ぶ男 その3（前書き）

（前回までのあらすじ）

偉大なKらぼの大先輩。小比類巻要。彼はKらぼ創始者であると同時に、画期的なシステムを世に送り出した、IT関連企業の若手社長だった。

しかし、要の態度に何かの違和感を感じる直人と順平。同期の娘たちを守れっ！戦うんだっ！直人っ！！！！

嵐を呼ぶ男 その3

「さあ、飲め飲めっ！二年もみんな二十歳超えてるんだって？浪人組か？」

「アルバイトに行った東山は一浪してますけど、俺達は現役ですよ。たまたま三人とも誕生日が四月なだけです」

実は俺と奈緒は誕生日も一緒の四月十二日、円は四月一日が誕生日だ。

「そうかそうか。まあ、わかったから飲め飲めっ！」

小比類巻さんは上機嫌だ。俺たち二年にガンガン酒を進めてくる。

「いやあ、しかし・・・見事に学年ごと男女比が一对一か。そして今は男が一人帰ったから、私を入れても一对一・・・」

まあ、言われてみれば確かに合コンみたいだ。しかも小比類巻さんの指示で男女にわかれて向かい合わせに座っている。女性は奥から円、奈緒、今野先輩、北川先輩の順。男は俺、小比類巻先輩、島先輩、神林先輩の順だ。上座とかは気にしない人たちらしい。

「ところで、小比類巻さんの会社ってどんな会社なんですか？」

そう言い出したのは円だ。仕事に興味があるというより、儲かる話なのかを知りたいのだろう。

サポロイドの開発者って時点で、たいそう儲けているには違いないのだが。

「社名は『株〕K S F』。サポロイドの応用技術を中心に、ソフトウェアの研究開発を行ういわゆるR & D企業だ。社名は『K o h i r u i m a k i S o f t w a r e F a c t o r y』の頭文字だ。ハイセンスなネーミングだろう?」

最後の一言と同時に右手の親指を立てて見せ、ウインクしながら白い歯を光らせる。ロバート・デニーロばりのナイスガイ気取りのスマイルを浮かべている。

正直・・・キモイ・・・

「まあまあ、難しい話はまた研究室ですればいいっ!今はじゃんじやんのんで楽しむべしっ!」

一言一言の間に俺たち三人のグラスにビールが注がれていく。円はずでにとろーんとしてきている。

酒に酔っているのか、逆玉の妄想に酔っているのかは俺にはわからない。まあ、たぶん、後者の気がするが。

とりあえず、こういう酒癖の目上の人間を相手にするときには、押されている振りをして、同量以上の酒を相手に飲ませることだ。

まったく自慢にならないが、俺は酒を注ぐのは得意だ。小比類巻先輩の隙について、ほとんど口をつけただけのグラスに、表面張力ぎりぎりの分量まで注ぎこむ。

本人は気づいていない。これこそ、『呑ませ屋直人』の真骨頂! 『必殺! ! 気づいたらへべれけ』だっ!

いくら呑んでもグラスの酒が減らないので、ほとんど口にしてい

ないという錯覚に陥るっ！

しかあっし！、実際には一口ずつでも、塵も積もれば山となるで、コップに十杯以上の酒はすでに吞ませているのだっ！

「ようつしっ！場所替えっぞおっ！カラオケじゃーっ！！！」

小比類巻さんは絶好調のようだ。まあ、今日は金曜日だし全おこりなんだから最後まで付き合おう。

「奈緒ちゃん大丈夫かなあ・・・ずいぶん飲んでいたし・・・トイレ長いよねえ・・・」

北川先輩がカラオケの受付をしている最中、今野先輩が相変わらず間延びした声で言う。他の先輩方も心配そうだ。小比類巻さんは相変わらずの上機嫌で神林先輩になにやら絡んでいる。

聞き慣れた着信音が鳴り響いた。電話でなくてメール、送り主はトイレに行くと言ってその場を離れた奈緒だった。

『気づいてるよね？円はもう限界ギリギリだと思っただけど・・・』

奈緒はメールにあまり絵文字などを使ったりしない。普段の口調が子供くさい割に文章だけは妙に堅苦しかったりする。と行っても、俺相手の時はこんな程度だ。過剰装飾がないだけ読みやすい。

奈緒も小比類巻さんにだいぶ飲まされていたが、全く平気だった。

実を言えば先輩たちとの飲み会は今日が始めて。年末からこの時期に春に掛けては、発表会の準備なんかで忙しいので飲み会どころではなかったのだ。

だから、先輩方は奈緒の酒の強さを知らない。奈緒の実家は酒屋で、親父さんは中学生の頃から奈緒に晩酌の相手をさせていたのだ。元々酒豪の家柄らしく、奈緒はどんなに呑んでも乱れることはない。

『今回については被害に会うのは小比類卷さんだし、先輩方にも知っしてもらった方がいいからこのままにしよう』

俺の返信はこうだった。

『OK』

奈緒の返信もこれだけ。

「あゝいたゝいからゝあゝ こいゝしゝくてえゝ？あなたを 思う
ほどゝ ウゝウ？」

俺達からすると若干時代遅れの歌を熱唱しているのはやはり小比類卷さんだった。

「小比類卷さん素敵ゝっ！」

円が騒いでいる。だいぶ激しく酔っ払っているようだった。

カラオケボックスに入ってから、円は焼酎のロックを三杯ほど呑んでいる。

もちろん小比類巻さんに進められてのことだ。

歌い終わった小比類巻さんは、マイクを北川さんに渡して、奈緒の隣に座った。

「奈緒ちゃん・ん・ん・飲んでる？コップ開いてるよ。若いんだからガンガンいかなきゃ・ん・ん・ウィスキーなんてどう？最近若い娘もハイボールを呑んだりするって言うじゃん！」

それを見た神林先輩が隣にいた俺の服を引っ張った。引きつった表情をしている。

小声で俺に話しかけてきた。

「や、やばいぞ・ん・ん・直人・ん・ん・彩原さんが・ん・ん・」

「え・ん・ん・ああ・ん・ん・大丈夫ですよ・ん・ん・」

「ば、バカヤロウっ！小比類巻さんは毎年二年の新人の女子が目当てで、この全額奢り飲み会をやるんだっ！去年は純菜はああいう感じだから、肘鉄くらわして逃げたし、詩織さんの時は島さんが後ろからマイクで殴りつけて気絶させて逃げたらしいんだっ！」

神林先輩は慌てている。どうやら、俺たち二年のことをまだ分かっていないようだ。

「じゃあ、小比類巻さんの目論見は毎年失敗しているんじゃないですか？」

「ああ、毎年そうだが・ん・ん・彩原さんは気が弱そうだし、篠塚さんはもうへろへろだろ？彩原さんだってこれ以上飲まされたら・ん・ん・」

「先輩・ん・ん・」

俺は半眼になって、先輩を見やりながら言った。

『心配なく』

「小比類巻さんっ！私だけ呑んでちゃ悪いですよ。小比類巻さんもガンガンいつてくださいねえ」

納得していない神林先輩の話を適当にやり過ごしながら様子を伺う。

奈緒が普段使わないような猫なで声で小比類巻さんに酒を勧めていた。

小比類巻さんの返答を待たずに、インターフォンから注文を始める。

「すみませ〜んっ！ウイスキーロック一つとストレートダブル一つ
くださあ〜い。チエイサーはいらないです」

「うおっ！や、やるねえ奈緒ちゃん。じゃあ、俺がストレートで、
奈緒ちゃんはロックで飲み比べしようっ！」

当然これは罠である。女の子に酒をガンガンのませてお持ち帰りしようという魂胆だろう。直接利害関係のある先輩方はそれを止められないし、二年の男子で唯一ここにいる俺はすでに酩酊している
と思っ込んでいる。ちゃんとそいう演技もしていたのだ。

だが、罠を張ったのはむしろ奈緒だった。

「あ、私はストレートが飲みたいなあ……小比類巻さんロックはお嫌いですかあ？」

「へ……？」

そうこう言っているうちに店員がウイスキーを持ってきた。

「あ、来た来た。じゃあ、小比類巻さん。いただきまあすっ！」

奈緒はウイスキーのストレートを一息に飲み干した。

「ほら、小比類巻さんの番ですよ。ロックをぐっと呑んで男らしいところを見せてください」

奈緒はこういう時は結構『黒い』。

さすがは俺の幼なじみ……童顔天然ロリ娘だが、人をハメる策略には見事に長けた悪女だ……。

と、再びメールが届いた。

『なんか言ったかなあ？』

奈緒からだった。小比類巻さんと話しながら後ろ手にメールを打ってきたらしい……。

なんでわかるんだ？口に出してはいないんだが……二十年来の幼なじみ故か……。

『しゅめん()』

これはメールじゃなくてアイコンタクトで返した。

「んっぷう〜！うまういつ・・・な、奈緒ちゃんは大丈夫う？」

「全然平気ですよお。まだまだいけます！小比類巻さんもストレー
トの方がいいですか？」

「へ・・・」

「私ももう少し呑みたいなあ」

容赦ねえ・・・。

「ふう！ああ美味しい。あれ、小比類巻さん、呑まないんですか？」

「ウップ・・・ヒック・・・」

小比類巻さんは口を抑えながら嘔吐をこらえている。我が幼なじ
みにながら恐ろしい・・・。

その時、小比類巻さんを挟んで奈緒の逆側で、ひっそりとスイッ
チが入った者がいた。

それに気づいた奈緒はすぐに行動を起こす。

「さすがにちよつと酔っ払っちゃいました・・・ちよつとトイレに
行ってきますね」

全く酔っ払った風のない足取りで奈緒はそそくさと部屋から出て
行った。俺の前を通る瞬間にはアイコンタクトを送ってくる。

「た、助かった・・・」

すでに虫の息の小比類巻先輩がソファーに倒れこんだ瞬間、マイクが回ってきていた俺は叫んだ。

「先輩方っ！すぐに部屋から出てくださいつ！」

俺にマイクを渡した神林先輩、二人でいちゃついていた今野先輩と島先輩、そして北川先輩の背中を押して部屋の外に出る。四人とも状況を把握できずに目を白黒させていた。

次の瞬間・・・

「ぐあああっ！酒足んねえぞっ！」

「ひ、ひいいいいっ！」

突然凶暴化した円の声が、防音対策のされたドア越しに聞こえてきた。

「テツメエ誰だこらあっ！何しようとしたあっ！スケベオヤジがこらあっ！」

「や、やめてえ！ゆ、許してえっ！ごめんなさい！ごめんなさい！」

叫び声に混ざって、ドスンとかグシャンとか大きな音が聞こえてくる。

「これ・・・何？」

おそろおそろという感じで神林先輩が聞いてきた。

「円に過剰に吞ませるところなるんですよ。普段は俺らが気をつけ

てますけど、無理に酔わせたりするところなるんです」

「去年の新歓コンパの時はいやらしい顔の四年生の先輩三人ほどが病院送りになったんですよお」

「イツキ飲みやし過ぎで急性アル中になった人が三人いるとは聞いていたけど・・・」

「ああ、お持ち帰りしようとした女の子にボコボコにされたなんて言いづらいから、そういうことにしたんですよ。まあ、円の名誉も守られましたし」

トイレには行かずに外で待っていた奈緒と一緒に説明すると、先輩方四人は目が点になっていた。これで余計な説明は省けるというものだ。とりあえず、円の酒の吞ませ方には先輩方も気を使ってくれることだろう。

「お前ら・・・見た目によらず黒いな・・・」

「な・ん・か、いいましたかあ？」

「い、いえっ！なっ、なにもっ！」

につこり笑った奈緒の言葉に島先輩はビビりまくりだ。

奈緒は一次会の時点で、酒を進められた時から、小比類巻さんを正面から撃退するつもりだったらしい。

一次会の時点でも、俺の『必殺！気づいたらへべれけ』で削られていた小比類巻さんは一溜まりもない。

ちょうど、小比類巻さんの限界と、円のスイッチが入るタイミンが一致したのは偶然だが、これだけやっておけば、凝りて奈緒と円に余計なちょっかいを出すことはないだろう。

『今バイト終わったぞ。どうなった？』

まだ、部屋の中からは、円の雄叫びと、小比類巻さんの悲鳴、断続的な破壊音が聞こえてくる。

俺は待っている間に順平から送られてきたメールにこう返信した。

『心配ない。予定通り。大魔神様降臨中』

『（苦笑）』

俺の返したメールへの返信はこれだけだった。どうやら順平のアイコンタクトの意味は小比類巻さんの正体にたいする警告だったんだろう。心配したところで、いざ飲みにいけば小比類巻さんの習性ぐらいは俺にもすぐに分かる。

一目見ただけでそれを見破れたのはどうしてかは分からないが、自分不在の間の処置を俺に任せたりもりらしかった。まあ、言われなくてもこれぐらいはやるけどな。

「ぎゃーっ！ひ、ひいつ！た、たしゆけ・・・」

「何泣きべそかいてんだオラッ！金持ちだからって調子こきやがって、なんで奈緒ばかり狙いやがって・・・」

ドアに耳をつけて会話を聞いていた奈緒が独り言のように言う。

「これ、本音なのかなあ・・・円・・・ちょっと怖い・・・」

「安心しろ・・・円は酔って切れただけだ。シラフであんだけ黒い奈緒よりは安全だ」

「な・ん・か言ったかなあ？」
「何でもありません・・・」

最終的なこの童顔天然口リ娘には誰もかなわないんじゃないだろうか・・・。

「ぎにゃあーーーーっ！！！！ごめんなさあーーーーっ！！！！ゆるぢてーーーーっ！！！！」

その後、一時間ほどは円大魔神の大暴走が続き、小比類巻さんは八デハデしいスーツは敗れ、体も傷だらけ、おまけに円が破壊した部屋のカラオケ設備や椅子などの備品の修理代なども全て払わされた。

翌朝、二日酔いになされながら目覚めた円から電話がかかってきた。

「ああ・・・直人・・・私・・・またやっちゃった？」

「やっちゃったと言えばやっちゃったが、それは正義の鉄槌だったから気にしないでいいぞ・・・」

「そう・・・迷惑じゃなかったんらいいんだけどさ・・・」

小比類巻さんだけでなく、先輩方もようやく俺達のことを分かってくれそうだ。

『おとなしそうに見えるのは外見だけなんですよねえ・・・』

黄金連休はお花見の季節 その1

ゴールデンウィーク。北海道では桜前線はようやくこれぐらいの時期に札幌周辺に到達する。

と言つても、気候の変動によって前後するので、『ちょうど連休中ならいいなあ』と言つのが毎年考えること。私たちの田舎も札幌からはそれほど遠くではないので、サクラが満開になるのはだいたい同じくらいだった。

私は篠塚^{しのつかまどか}円。北都学院大学情報学部人間情報学科二年。学生独立研究室、通称『Kラボ』に顔を出す傍ら、テニス部にも所属している。スポーツ万能、容姿端麗、勉学優秀の才女などと言われることもあるけれど……。

すみません。酒癖は悪いです……ごめんなさい……またやっちゃいました……

直人と奈緒は気にするなどは言うし、小比類巻さんが弁償したから大丈夫だったらしいけど、危うくあそこのカラオケも出禁になるところだったよあ……。

北都学院大学のある美香幌市文教台は、三つの大学と二つの専門学校、一つの高校が固まっている学生街。そして学生街の割に飲食店やなんかが少なかつたりする。カラオケも徒歩圏には三店舗だけ。すでに一軒は去年の新歓コンパで三人ほど病院送りにした上に、

店内をめちゃくちやにしてしまったので、出禁をくらってしまったり……。

これ以上出禁が増えたら……近所で飲むなんてできなくなるなあ……。直人と奈緒がいればストッパーを掛けてくれるはずなんだけど、この前はどうも小比類巻さんにお灸を据えるために、放置したとか……。

いや、小比類巻さんが危険人物だっというのはわかったけどさあ……少しは私の名誉とか言うのも考えて欲しいんだけど……。あの腹黒口リ娘と根暗策士は……。

連休中とは言え、実家には三月に帰ったばかりだし、特別アルバイトも見つけられなかったので、テニスの練習が終わったあとは、やっぱりクラブに来ていた。

研究テーマを決めろって言われたけれど、先輩がいたら相談しようかな……。

「あ、おはようっ！円ちゃんっ！」

相変わらず奈緒は元気だ。

「おはよう。奈緒。先輩方は？」

「島さんと紺野さんは例によって忙しいから。神林さんと北川さんは夕方に顔出すとか言っていたよ」

「直人と順平は？」

「順平くんはアルバイトみたいだね……。直君は、出てくる時になおくん声を掛けたけど、まだ寝ていたから……。もう少ししたら来るん

じゃないかな？ここでカップ麺食べるしか、お昼ごはんの当てがないと思うし……」

うむ。相変わらず奈緒は直人にべったりだな。ちゃんと朝から様子を見に行ったらしい。って言うか、もう二十歳にもなって、幼なじみとは言え『直君』ってどうよ……。しかも、二人は直人と奈緒だから、ややこしいんだよなあ……。

『直君』と『奈緒ちゃん』か。君付けとちゃん付けで区別しろと……。

まあ、そこはいいか。

「で、今日はすばらな幼なじみのために、かわいいなおちゃんが、お弁当を用意してあげたわけだ」

奈緒の席の上に弁当箱が二つ乗っている。しかも、いつものじゃなくて、行楽用の重箱だ。

「妬けちゃうなあ……」

「え、そ、そんなじゃないよっ！ただ、一日一食カップ麺だけだっというから……。それに直君の分だけじゃないよ！お天気もいいし、みんなで前庭の芝生でご飯でも食べようと思って……。桜も咲いているし……」

言っていることは元々そういつつもりなんだとは思う。

でも、顔を真赤にしながら言っているのは、私の言うことも本当だからなだろうなあ……。解り易いわ。この娘。

ちなみに、この大学の前庭は昔この一帯にあった水無川の名残だ

とかで起伏に富んだ地形をしている。それなりの広さがあって、ちよつとしたピクニック気分が味わえたりする。それに、桜の木もたくさん植えられているから、キャンパス内でお花見ができたりするのだ。

と言つても、普段は学内での飲酒は禁止なのだけだ。

「まあ、そういうことにしてあげよう……でも、三人？」

「うーん、順平君は忙しいみたいだよ」

「ふーん……じゃあ、私はちよつと出かけてくるかな？」

「え？何で？」

「邪魔しちゃ悪いし！」

私はさつさと奈緒を置いて部屋を出ることにした。

たまあに……だけど、奈緒のこついう所は見えていらいらすることがある。

思春期じゃあるまいし……好きなら好きでドーンと行けばいいのに……。

でも、そもそもが、二人が未だに中途半端なのは私のせいだった。あとから思えばだけだ。

大学というところは、『若い欲望^{リビドー}の開放される空間』だと思う。

どんなに高校時代を真面目に過ごした人でも、大学に入ると一気に解放されてしまう。

特に一人暮らしの学生の場合は、その何割かが一年目の最初のゴールデンウィークあたりに、

彼氏彼女ができる。というか、半同棲ぐらいを始めてしまう。

それは寂しいからだ。誰だって、実家から出てきて一人暮らしを始めれば、孤独を感じる。

遠方からの学生は多くの場合は高校の同級生も周囲から居なくなる。

大学に入って一生懸命友達を作り始めるわけだけど、程なくして気づくわけだ。

自分を縛る親だの教師だのの鎖から解放されていることに。

高校生と違うのはそこで同棲とかをしても、後ろめたく感じる必要もほとんど無くなることだ。

同性の友達でわいわいやるだけの場合もあれば、異性のパートナーを見つけてくつつく場合もある。

どちらにしろ、高校まではコソコソ隠れてやっていたようなことをおっぴらにできる。

私は知っていた。高校から一緒になった奈緒が、幼馴染の直人のことをずっと好いていたのを。

物好きだとは思っけどね。あんな根暗でも、十年以上一緒に過ごせば、何か美点を見つけれらしい。

でも、人一倍生真面目で照れ屋の奈緒は、高校時代にもアプローチすることなく、直人には幼馴染以上の感情があるようには見えなかった。まあ、ちょっと見れば、世話焼きの女房か妹って感じだったけど。

私の知る限り、高校時代だけで十五人は奈緒に告白して、かわい

そつに玉砕している。

一度だけ、その告白の場に出くわしたことがあった。

「彩原さんっ！ずっと・・・ずっとあなたが好きでした。っ、付き合ってください！」

ベタな告白だった。でも、その男子は学校でも人気のイケメンで、振られることなんて考えてなかったと思う。実を言えば、その頃は私はその男子が好きだった。

高校の屋上、階段を登っていく奈緒を見かけて一緒にお弁当を食べようと思った私、声をかけなかったのは女の勘だったのかもしれない。

屋上に出るドアの影から、複雑な思いで、奈緒とイケメンの様子を伺っていた。

「ごめんなさい。私、好きな人がいるから・・・」

意外とはつきりと断った。もっと押しに弱いと思っていたのに・・・。

「ひょっとして・・・新橋か？」

奈緒は何も言わなかった。それがどんな言葉よりも雄弁に彼女の気持ちを表現していたと思う。

「なっ、何であんな根暗のことっ！」

この一言のお陰で、私は奈緒との友情が続けられたのだと思う。器の小さい男・・・私の幻想に彩られた恋はこの一言で綺麗に消えていった。

「あなたには分からないし、そんな必要もないよ。私にしかわからないことだから」

奈緒の言葉には刺があつた。あんなに真剣に怒っている奈緒は後にも先にも見たことがない。

だから、あの時から本当は奈緒のことをずっと応援しようと思っていた。

いつの間にか、私の恋愛なんかよりも奈緒のことの方がずっと気になっていったのだ。

お陰で、彼氏ができる兆しは全くない。

でも、私は間違いを犯した。自分が一人になるのが怖かつたのだ。

三人がそろって同じアパートに三軒ならんで部屋を借りたとき、別にそれには深い意味を感じなかった。

半分共同生活みたいな感じになったとき、二人が付き合いだしたら、私だけ一人になってしまうなんてことを考えてしまった。

そりゃあ、『間違いが起きないように』なんて、二人の両親から

言われていたりもしたけど、どちらも、それほど本気で言っていない。そうならそうならただと達観しているような親たちだった。と言うか、奈緒のお母さんは直人のことを気に入っているみたいで、学生結婚でも大歓迎ぐらいのノリだった。

普通に私がいつも一緒にいるのを遠慮していれば、自然とうまくいったのではないかと思う。孤独に耐えられなかった私が、二人にべったりつきまとったせいで、どれだけ進展の機会を潰してしまったのだろう……

それに気づいたのは、もう夏休みを越した頃だった。それから私はテニスサークルに入ったり、アルバイトを始めたたりして、二人と過ごす時間を短くしていった。

ところが、なぜか三人纏めてこのクラブに誘われてしまった。二人もやたらと私を仲間に入れようとした。

私は二人を見守らねばならない。でも、邪魔をしてはいけない。自分が孤独になることを、今なら受け入れられる。二人には幸せになつて欲しい……

「おーいつ！篠塚っ！」

「あれ？順平。バイトじゃなかったの？」

話しかけてきたのは東山順平だった。一浪して入学しているから、年齢は神林先輩と同じ。

でも、本人はあまりそういうことを気にして無いらしい。

私たちがクラブに入ったきっかけは、直人が順平に誘われたからだ。

学科は違うけど、一年の時に直人と語学で一緒だったらいい。二人はずいぶんと気が合うみたいだ。

たまに不機嫌になることはあるけれども、普段からテンションが高くて、ムードメーカーだと思う。

アルバイトでいつも忙しそうで単位を落としているところはマイナス点だけだ。

「早朝シフトだったからな。家帰って寝ようかと思ったんだけど、近所の改装工事がうるさくて。研究室で寝ようかと思ってさ」

「ああ・・・それなら今はちょっと避けて欲しいかな。あ、ご飯食べに行こうよっ！学食で」

今行ったら、せつかくの私の気遣いが無駄になる・・・

「ああ、構わないけど・・・直人と彩原は誘わないのか？」

しょうがない、この男には分かってもらっていたほうがいい・・・

「たまには二人にしてあげない？」

一瞬、順平はきよとんとした。でも、すぐに理解したらしい。いいねえ。物分りのいい男は嫌いじゃないわよ。

「ああ、なるほどね・・・」

幸いにして、順平は奈緒に気があるとかじゃないらしい。

それなりにイケメンだし、性格も明るいし、学業はともかくアルバイトはバリバリやれているみたいだから、モテないはずはないんだけど、彼女ができたって話は聞かない。

・・・ひよつとして・・・ゲイと思ったこともあるけれど、そんなはずもないし・・・。

「あ、でも学食は今日は休みだろ。『えふたま』にいかないか？パスタが食べたんだ。おごるけど？」

「あら、太っ腹じゃないのっ！」

「まあ、たまにはいいだろう。バイト代入ったし」

『えふたま』は大学近くにあるパスタ屋で、『For Eggge s』というのが正式名称。文教台の数少ない飲食店の一つ。ちよつと女の子には量が多いんだけど・・・食べれちゃうんだよねえ。デザートは巨大パフェまで・・・

「にゃあるほど・・・いやあ、一年目から怪しいとは思ってたんだけどさ・・・そういう事なんだ。あの二人・・・」

「ちよつとだけ、見ていてイラッとするところがあるよねえ・・・」

「確かに・・・」

「順平は直人と恋話とかしたことないの？」

「あいつガードが硬くてさあ・・・二人で呑んだ時もそういう話はやたらとうまくはぐらかすんだよな。こっちにうまいこと飲ませてつぶしにくるし」

順平はもう私たち三人の立派な仲間だ。この話は知っておいてもらっていいと思った。何より、あの煮え切らない二人をくつつけるには協力者が必要だ。直人の親友の男で、何かと気が付くし行動力もある。これは貴重な人材ですよ・・・

「で、どうしたらいいと思う？」

私はカルボナーラをガツガツと食べながら訊いてみた。いろいろな事を試してみたけれども、あの朴念仁とローティンレベルの照れ屋にはほとほと手を焼いているのだ。

「ふむ・・・幼馴染で二人でいることも別に普通って感じになっちゃってるんだろな。特に直人は・・・。家族というか妹みたいな感じになってるんだろ？」

「正しくそうね。なかなか鋭い観察眼だわ・・・」

「奈緒ちゃんの本気具合は間違いないわけだ？」

「そりゃそうよ・・・でも、別にこれ以上親密にならなくても、今は十分一緒にいる時間も作れて楽しいものだから、より積極的に行く気にもなれないみたいね・・・」

気持ちはわかる。幼馴染で親しい親友で、まるで妹のように、手を焼いたり甘えたりできる。仮に成功する可能性が高くて、気まぐずくなるかもしれないリスクを負いながら、告白するなんて怖くてできないんだろな・・・。

今の関係を壊したくないとは思っているに違いない。

「それには、円の存在も一役買っているな・・・」

「どういうこと？」

これはまた意外な話だ・・・一年前ならともかく、私は二人の障害にならないように心がけているつもりなのに・・・。

「もちろん、円は邪魔する気なんてないだろうけどさ。でも、二人が付き合い始めるにしろ、うまく行かなくて気まぐずになるにしろ、

三人のくくりで考えたら今の関係のままではいられないだろ？」
「ええと・・・どういうことかな？」

なんか、順平はすごい真剣だ。

「直人も奈緒ちゃんも、二人って言うより、三人で一塊の関係と
思っているんだよ。同じアパートに三人で並んで部屋を借りたりして
いるからさ。それで、そのうち二人がそうなっちゃったら、三人の
関係が崩れちゃうだろ？」

・・・なぜだか胸がズキンと痛む・・・

「そうか・・・そうだよね・・・」

「ああ、なんかキツく聞こえたら悪い。でも、そうだと思うぜ」

去年、私がなんとなく思っていた事を二人も考えているのかもし
れない。

「私のことは気にしてほしくないんだけどなあ・・・」

「でも、円だって彼氏もいないだろ？いつも三人でいるし・・・」

「だからって、二人から距離を取るのも変な話じゃない？」

特に甘えん坊の奈緒はすぐに気にするだろうなあ。

「つまり・・・まず、円に彼氏ができれば、二人も考えるさ。円の
幸せを奪ってまで、三人の関係をそのままにしたいとは思わないだ
ろ？」

「って・・・彼氏なんてそうそう簡単にできるもんじゃないでしょ
・・・」

言われてみればそのとおりだけど、ただとすぐにそのとおりに出来るもんじゃないんだ・・・友達にくつついてほしいから、自分が見繕って適当に彼氏を用意するなんてできるわけがないし・・・。

「円はさあ・・・男に興味ないんかい？」

「そ、そんなわけないでしょうっ！」

「なーんかさあ・・・変に二人に気を使って自分のことをおろそかにしているように見えるんだよなあ・・・」

ギツクウツ！なんて鋭いのよこいつ・・・

「容姿端麗、スポーツ万能、学業優秀、スタイル抜群・・・こんな条件が揃っていて彼氏がない理由がわからないんだが・・・告られたりしてないの？」

「いや・・・まあ・・・ないわけじゃないけど・・・」

正直に言えば、この一年は月に一人二人は言い寄ってきている。高校生じゃあるまいし、呼び出して告白とかされるわけじゃないけど、デートに誘ってきたりするやつは多いし、実際に誘いに乗ったことも何度かはある。

「・・・結局ね・・・一緒に飲みに行ったりすると・・・ひかれちゃうんだよ・・・」

「ああ・・・酒癖か・・・」

すぐに分かれるとちよつとだけイラッと来るんだけど・・・。

「それぐらい愛嬌って男もいると思うんだが・・・容姿と金回りのいい坊ちゃんだけ相手にしてないか？」

「あんた・・・さっきから尖すぎるわ・・・って言うか問題は私の

恋愛じゃなくて奈緒と直人のことっ！」

いつの間にか問題がすり変わっているっ！

「いやさ・・・二人の問題のようできて、実は三人の問題なんだよ・・・」

「じゃあどうすればいいのよ？」

「要するに三人の相互依存関係が問題なわけだな」
「難しい言葉を・・・」

私は半眼で睨みつけながら呟いた。相談しているのはこっちなんだけど、順平はなんだか尖すぎる。

「ぶつちやけ・・・円が二人から男でも作って離れていけば、自然に二人はくつつくんじゃないかと・・・」

言われてみれば確かに・・・

「だからって、別に絶交する必要なんてないし、友達づきあいは続くだろ？まずは自分のことからじゃないか？」

「・・・そうかも知れないけど・・・男なんていないし・・・」

そりゃね、ぶつちやけ、自分にもんだから、他人の恋愛を面白が・・・いや、代わりに心配しているってところはあるよ・・・代償行為って言うの？まともな恋愛対象が現れれば私だって・・・

「俺でどうよっ？」

へ・・・いや、ちょっと待って・・・

「じよ、冗談でしょ？」

「冗談じゃなかったら？」

ちよ、ちよ、ちよっと・・・何よそれ・・・急展開過ぎっ！

黄金連休はお花見の季節 その1（後書き）

聖史「どうも！島です」

詩織「こんにちわあ。詩織でえす！」

聖史「やっとこさ、ラブコメの『ラブ』がでてきたなあ・・・」

詩織「いえいえ・・・私たちは初めっからラブラブでしたよあ」

聖史「紹介のところだけね・・・」

詩織「作者としては、出来上がっちゃった二人なんてどうでもいいって思っているのかなあ・・・」

聖史「出来上がったって・・・」

雅也「先輩・・・顔真つ赤ですよ・・・意外とうぶですね・・・」

聖史「お前は確か設定上は女ったらしのはずじゃ・・・」

雅也「身内には手を出さないの、今のところ垂らしをやる余裕がありません。

小比類巻さんに全部持ってかれています・・・」

詩織「というかあ・・・すでに奈緒ちゃんとか円ちゃんのキャラクタ―は初期設定からだいぶずれているみたいですよあ」

雅也「まあ、作者はいい加減だから・・・」

おっしゃるとおりで。でも、そうやって途中から出来上がっていったキャラクターの方が面白いんですよね。

円はカリスのリボンなんですけど、まあ、年齢が若い分、カリスほどキャリアウーマン風味はでないでしょう。

奈緒はよくある妹系な幼馴染キャラから始まっているんですが、第三話で『腹黒』属性が着いたので、これはこれでちょっと面白い感じになって来たと持っています。

若干、お気に入りの作品へのオマージュあり。

〈次話予告〉

「ねえねえ……円ちゃんと順平くんの様子……なんかおかしくない?」

「ふむ……なんかギコチないな……」

「順平くん……まさか……」

「いやっ……あいつに限って……まさか……そんなっ!」

語り手は、三年の神林先輩の予定……

〈お願い〉

お気に入り登録、ご評価、ご感想をお待ちしております。
嬉しいご意見もドシドシお願いいたします。

黄金連休はお花見の季節 その2（前書き）

（前回までのあらすじ）

直人と奈緒の煮え切らない関係に業を煮やす円は順平にそのことを相談する。順平は円の存在が二人の関係を進展させない原因だとして、円もそれを認めた。そこで、順平が口にしたのは、円が彼氏を作ればいいということ。そして、自分がそれに立候補してしまった。円はいつたいどうするのか・・・。

黄金連休はお花見の季節 その2

なぜだ・・・なんか雰囲気がおかしい・・・

夕方、クラブに顔を出して、二年生の研究テーマを考えるのに相談に乗ってやろうと思った俺は、研究室内の異様なムードに正直尻込みした。

俺は神林雅也^{かんばやし まみや}。学生独立研究室、通称『クラブ』の責任者である室長を務めている。と言っても、せいぜい打ち合わせの司会をした^{い。}り、たまに大学側や教授と折衝をする程度で普段はあまり忙しくない。

だが、今日に限っては、そんな気楽な気持ちでは研究室に長居できそうになかった。

様子がおかしいのは篠塚と東山の二人だ・・・篠塚は何かぼーっとして、何も手につかない様子。一方東山は時々あることだがやたらと不機嫌だった。いや、今までにないほど不機嫌なのだ。やたらとそわそわして態度が刺々しい・・・。

二人に何かあったのか？

二年の他の二人のひそひそ話が聞こえてきた。

「ねえねえ・・・円ちゃんと順平くんの様子・・・なんかおかしくない？」

「ふむ・・・なんかギコチないな・・・」

「順平くん・・・まさか・・・」

「いやっ・・・あいつに限って・・・まさか・・・そんなっ！」

二人は何を思いついたのだろうか。俺には何が何だかわからない。この二人は傍から見ていると百パーセントバカップルだ。他の二年よれば、別に恋人関係ではないらしいが、とてもそうとは思われない。そうじゃないとしても、そうなることは秒読みではないかと思う。

そのバカップル二人が騒ぎ出した。

「順平っ！貴様っ！円に何をしたっ?!」

「はあ?!」

不機嫌な顔をしていた順平がきよとんとする。

「円ちゃん・・・大丈夫・・・汚れてなんてないよ・・・家帰ってシャワー浴びよ。さっぱりすれば、少しは嫌なことも忘れられるよ・

・・・」

「えっ?」

篠塚もきよとんとしている。

「ちよ、ちよつと待てっ！お前らいつたいどんな勘違いをっ?!」

「勘違いだどっ！言い訳とは見苦しいぞっ!!!」

「順平くんっ！見損なったわっ！そんな酷い事する人だなんて思わなかつたっ！」

二人の剣幕はものすごい。

「ちよつと待てっ！その二人っ！別に順平は私に何もしていな

「いわよっ！勝手に変な妄想して盛り上がらないでっ！」

篠塚は二人の剣幕に負けずにそう言い返した。

「まったく・・・どんな頭の構造しているんだか・・・どっからそんな勘違いがでてきたのよ・・・」

「いや、全くなんだが・・・。しかし、そろそろ何か言い出さないと室長として格好が付かないな・・・。」

「はいはい。相変わらず賑やかな。二年は。で、研究テーマは決まったの？今日は相談に乗ってあげるから・・・ちゃんと考えておかないと、小比類巻さんに変なテーマを押し付けられるわよ」

北川純菜が研究室に入ってくるなりそういった。なんだか、母親のような感じだが・・・あ・・・出番を奪われてら・・・。

「はい。真面目に考えましょう！」

「そうだな。冗談はこれぐらいにしておこう・・・。」

「冗談のつもりには酷過ぎる言い草だったと思うんだが・・・」
「名誉毀損もいいところよね・・・。」

彩原と新橋の態度に東原と篠塚はだいぶ腹を立てているようだが、まあ、この四人は結局仲がいいので、大した問題にはならないだろう。

「ああ、ええと、じゃ、とりあえず、なんか自分でテーマを考えてきた奴はいるか？」

・・・しーん・・・

そうだろう・・・まあ、そんなこつたるう・・・去年の俺と北川
だつて似た様なもんだつたしな・・・。

「まあ、難しく考える必要はないのよ。まず、自分の好きなことと
か、得意なこと、それから自分がこの大学を選んだ動機とか、何で
もいから自分がポジティブになれることを考えてみて。それを箇
条書きにして、自分が好きなことってなんだろうって考えながら、
この研究室でやれそうなことを考えてみればいいわ」

「箇条書きにしても、研究テーマに結び付けられない人は、俺らが
相談に乗る。それでも決められなければ、それを持って小比類巻さ
んに相談すれば、なんだかんだで、それっぽいテーマが出来上がる
さ」

実際そういうものなんだよな・・・

「『それっぽい』っていう感じでも、先輩方みたいに認められるよ
うな研究ができるんですか？」

相変わらず東山は機嫌が悪いな・・・。

「最初のテーマは取っ掛かりだ。やっているうちに、少しずつ課題
が明確になるし、途中でテーマ自体が変わることもある。でも、最
初に進む方向を決めて進まないで、どこにもいけないんだ。自分が
面白いと思えることから始めれば、とりあえず、ヤル気にはなれる
だろ？」

ちよつと良い事言ってみたあつ！

「よつするに・・・やっているうちに、テーマは決まるから、最初

は適当でいいと」

いや・・・おい・・・新橋。間違っただけだし・・・。

「と言って、まだ何も考えてないんでしょう？じゃあ、ここでまた話しても無駄だから、明日以降、一人ずつ相談にのるわ。アルバイトとか詰めている人いる？」

「東山くらいか？」

「いや・・・連休中は休み。一個減らしたんで」

「あら、掛け持ちしているだろうとは思っていたけどねぇ・・・」

「はあ、まあ、目標金額には達したものだから」

「ふーん・・・」

北川もそれ以上は聞かなかった。

「じゃあ、俺と北川はだいたい夕方には顔をだすから、適当にどっちかを捕まえて相談してくれ」

「せめて、さつき話した箇条書きぐらいは用意しておいてね。全然関係ないことでも、とにかく自分の事を表現できる話があればそれでいいから」

「はーいっ!」

元気に返事をするのは彩原だけ。根暗の新橋はともかく、篠塚と東山はいつたいたいどうしたんだか・・・。が、今日も結局誰のテーマの決まってねぇな・・・まあ、毎年のことか・・・。

「それから、明日、天気がよかつたら花見にでも行かない？円山公園でバーベキューとかどう？」

「いいですねっ！行きたいですっ!」

「あら、奈緒ちゃんはさつき直人くんと二人っきりで花見していたのでは？」

「せ、先輩・・・見てたんですか・・・」

「え、べ、別に二人でって、円ちゃんも順平くんも参加してくれなかったから二人になっちゃっただけで・・・」

彩原と新橋は赤面してしどろもどろだ。まあ、今更恥ずかしがるようなことでもないんだけどなあ・・・。思春期でもあるまいし・・・。

「って、冗談はさておき、みんな参加できる？」

とりあえず、不参加の人はいないようだ。

「じゃあ、私は自宅が近いから、道具一式は準備しておくわ。公園に運ぶのは手伝ってね。お肉とかはすぐ近くにスーパーがあるからそこで当日買えるから心配しないで。四時に円山公園駅の五番出口前で集合ね」

北川は札幌の円山公園近くの実家から通っている。円山公園は札幌で最もメジャーなお花見スポットだ。他にも野球場や動物園があるって、街の中心部に近いわりに、自然を楽しめるスポットも多い。花見の季節には敷地内でバーベキューをすることができ。

ちなみに、札幌で外でバーベキューと言えばその実態はジンギスカンである場合が多い。学生は通称『ジンパ』と呼ばれるパーティーをよくやる。花見の季節とは関係ない。北都学院はキャンパス内アルコール禁止で、炭を炊くのも許可が必要だが、北海道大学などでは春から秋にかけては毎日のようにキャンパス内でジンパの煙が立ち込める。

大学生協や近所のスーパーで道具から食材まで全部揃うから、最も手軽で安価なコンパの形態だったりするのだ。この点は北都学院から見ると羨ましいところだ。ん？そもそも大学のランクが違うって？そんなこと気にしない気にしない……。

「神林先輩、炭はもう準備できましたよ」

「ああ、じゃあ、あとは女の子たちが食材を買ってこればOKだな。呑んで待つてようぜ」

肉や野菜は北川達が買いに行ったが、酒については、家に会ったものをクーラボックスに入れて俺が持ってきた。北川にはかり仕切らせてたまるか……室長は俺なんだから。

「勝手に始めて北川さん怒らないですかね？」

「新橋よ……細かいことは気にするな。怒られるのはどうせ俺だし……」

「神林さん……」

哀れみの目で俺を見るな……泣きたくなる……

とりあえず、俺、新橋、そして相変わらず機嫌の悪い東山と三人で酒盛りを始めた。

「つくう！まだちょっと肌寒いですけど、外で飲む酒はいいっ！」

五月の札幌は春とは言え、日によってはコートが欲しくなること

もある。今日は天気はいいが、まだまだ風が吹けば寒く感じる。それでも、外であるというだけで、なんとなく酒はうまく感じるものだ。

「ああっ！もう始めてるっ！」

「直君ずるいつ！」

「「ご、ごめんっ！」」

結局、北川に怒られたのは俺だが、新橋も彩原に怒られるわけか……。
ん？共犯なのにどうして東山は怒られないんだ？
ああ、篠塚もあの調子のままみたいだ。どうしたんだかいったい……。

「じゃあ、ジンギスカンの準備もできたし、改めて乾杯っ！」

「かんぱーいつ！」

乾杯の音頭まで北川に取られてしまった……。

いいんだ……細かいことは気にせずジンギスカンを楽しもう。

一口にジンギスカンと言っても、いろいろなやり方がある。ここ何年かで東京の方でもポピュラーになった生ラムジンギスカンは店で食べるもので、アウトドアでは一般的ではない。

薄目にスライスされた円形の肉が主流で、味付きと生肉と呼ばれ

るものがあるが、どちらも冷凍物だ。札幌周辺では生肉が主流で味はついてないやつを、スリットが入っていて余計な油を落とすとしてくれるジンギスカン鍋で焼く。

ちなみに旭川周辺など道央地域では、主に味付き肉が使用され、すき焼き鍋のようなやや深めの鍋で、タレで煮こむようにしたりする場合がある。今回は普通に生ラムをジンギスカン鍋で焼くことにした。

「直君っ！お肉ばかり食べていたらダメだよ。ちゃんと野菜も食べないとっ！」

「うるさいなあ・・・子供じゃないんだからっ！」

「子供みたいな好き嫌いするからだよっ！普段からちゃんと野菜食べてないんだから、こういう時ぐらい・・・ほらっ！よそってあげるから！」

「どう見ても女房か、そうなければお母さんみたいなもんだよねえ・・・」

「そ、そんなんじゃないですよっ！先輩っ！」

高校生かっつうのっ！

「さて、後片付けも終わったし、せっかく札幌まで出てきたんだから、ススキノで呑んでいこうか？」

時刻はすでに夜八時。周りも暗くなってきたが、まだまだ盛り上がっている人たちもいる。この時期の円山公園はだいたいこんな感じだ。北川は初めからススキノで飲みたかったのだろう。わざ

わざわざ早めにジングスカンを終わらせたのだ。

「でも、今から飲み始めたら、すぐに終電ですよ？北川さん以外はみんな文教台だし・・・」

「朝まで呑めばいいじゃないっ！」

「え・・・いや・・・先輩・・・」

「ネットカフェでも、カプセルホテルでも、サウナでも、安く泊まれるところなんていくらでもあるし、カラオケボックスに朝までいたって、たいした金額にはならないわっ！」

き、北川・・・どうした・・・

「だって、この前は小比類巻さんがいたせいで、警戒して全然呑み足りなかったのよっ！大丈夫っ！お金はお姉さんがどうにかしてあげるからっ！」

渋っていた二年生も、北川のこの一言で動き出した。まあ、北川は実家住まいだし、奨励金もたっぷり取ったし、多少はアルバイトでも稼いでいるしな・・・って言うか、金は俺も困ってないぞ・・・

ちなみにこの前も終電時間など過ぎていたから、今回と逆に円山まで帰らないと行けない北川は帰れなかった。北川の場合は、友達の家とかいくらでも大学の周辺に泊まる場所がある。こっちはそうは行かないのだ。

「ああ・・・ええと・・・俺も持ち合わせあるからある程度出せるぞっ！」

「そ。神林君は在宅プログラマで稼ぎまくっているからお金は心配ないわっ！最悪文教までタクシー乗り合わせでも大丈夫っ！」

初めっから俺を当てにしていたのかよ・・・

「まあ、小比類巻さんがいなければ安心して楽しめそうですねえ・・・」

「ちゃんと、直人と奈緒で私にストッパーかけてくれるよねえ・・・」

「明日はアルバイトもないからいいか・・・」

「お金の心配しなくていいなら行きますよ」

二年がそれぞれに二次会参加の意向を示してきた。さあ、今日は・・・今日も悪い酒になりそうだった！

案の定、ススキノでの酒はずいぶんひどいものだった。

二次会は居酒屋。ここまでは、二年も金を出した。

三次会はバー。俺と北川で半額ずつ出して、三万ずつ。一人頭一万だが、俺と北川はそこまで呑んでいない。遠慮無く飲み散らかしたのは二年の奴らだ。

さらに懲りない北川はカラオケに誘う。この前は小比類巻さんを気にしてまとも歌えなかったのが心残りだったらしい。で、金は全部俺が払うわけだ・・・。

「いえーいつ！みんな呑んでるうっ！」

北川・・・キャラが崩れているぞ・・・

それより心配なのは篠塚だ。

「おい・・・篠塚にそんなに飲ませて大丈夫なのか？」

この前みたいにやられたら、さすがに弁償代までは出ないぞ・・・。

「ああ、大丈夫ですよ。円ちゃんは焼酎を飲むと暴れるけれど、今日はビールとワインじゃないか。ワインを呑んだときは暴れるんじゃない、おとなしくなるんですよ。呑ませ方次第です。ちなみにウィスキーを呑ませると泣き上戸になります」

「はあ・・・」

ようわからん・・・。酒の種類によって良い方が変わるってのはある話だが、ずいぶんと極端な奴だなあ・・・。

結局、北川の気がすんでカラオケを出たのは朝方四時過ぎだった。すでに、空は少しずつ白み始めている。

「神林ちゃんっ！あとは二年のことよろしくねっ！私だけ方向違うからタクシーで帰るねえっ！」

北川は上機嫌で帰っていった。後始末は全部俺かよ・・・。

「あれっ？神林さんっ！円ちゃんと順平くんがいないですよ・・・はぐれちゃったみたい・・・」

不景気とは言えばススキノはそれなりに人が多い。どうやら、どこかにはぐれてしまったらしい。

「だいぶ酔っ払ってたしなあ・・・まあ、一人なら心配だが、東山は金も結構持つてるだろ？自力でタクシーに乗るなり、ネットカフェに入るなりしてどうにかするだろ・・・」

そこまで面倒見切れねえよ・・・

「奈緒っ！携帯は？」

「どっちでもないよ・・・」

「二人でホテルにでもしけ込んでたりして・・・」

「神林さんっ！下品な冗談は嫌いですっ！」

「わ、悪かったよ・・・」

カマトトぶりやがって・・・

「な・ん・か、言いましたかあ？」

「な、何も言っていないです・・・」

なんで分かるんだ？

「口に出さなくても、悪口だけはわかるんですよ。奈緒は・・・」

「そんなのお前のだけわかれば十分だろう・・・」

まったく・・・今年の二年はホントよくわからない・・・。

「よし、まあ、二人一緒ならどうにかなるだろう。俺達は三人でタクシーのつて帰るぞっ！」

「はぁーいつ！」

「すみません。お願いします」

札幌から文教台までのタクシー代は一万を超える・・・
本日の出費は五万ほど・・・学生の飲み方じゃねえぞ・・・

黄金連休はお花見の季節 その2（後書き）

詩織「なんかあゝ・・・前書きと内容があつてないように思えませんかあゝ？」

島「円への順平の告白はどうなったのかわからんな。これでは・・・

「直人「きつと、神林先輩を語り手にした時点で、その真相は次回に回したんでしようねえ・・・前書きをあとから書いているんだから、内容変えればいいのに・・・」

いや、おっしゃるとおりなんですがね。直人くん。

でも、「前回までのあらすじ」はああ書くしかないじゃない・・・あらすじは確かにそうなんだから・・・。

〈次話予告〉

「なつ、直人君・・・だめだよ・・・そんな・・・」

「ダメって・・・俺と奈緒の仲じゃないか・・・」

「そうだけど・・・恥ずかしいよお・・・」

「大丈夫だ・・・優しくするから・・・」

語り手は、直人と奈緒と円の予定・・・

マルチキャラクター一人称視点とでも言うのでしょうかね？
表現手法って勉強したほうがいいな・・・

〈お願い〉

お気に入り登録、ご評価、ご感想をお待ちしております。

厳しいご意見もドシドシお願いいたします。

黄金連休はお花見の季節 その3（前書き）

（前回までのあらすじ）

北川純菜の提案で、円山公園でのジンパ（ジンギスカンパーティー）を行ったクラボメンバーは、その夜、そのままススキノに繰り出した。

カラオケまで数店舗をはしごした後、純菜がタクシーで帰ったところで、直人達は円と順平がいないことに気づく。

二人はいつたい何処に・・・

黄金連休はお花見の季節 その3

二日酔いだ・・・ベットの从上から動いた瞬間に吐きそうだ・・・
どうも。直人です。

ただいまの時刻は十三時。でも、起きれそうにない。そういえば
ソ マックも切らしていたな・・・。

とりあえず・・・もう少し寝てやり過ぎすか・・・

「直君っ！直君っ！大丈夫っ？」

幻聴か・・・いや・・・そんなはずないな・・・いつもの幼馴染
だ・・・

「うう・・・あんまり大丈夫じゃない・・・吐きそうだ・・・」

酸っぱいものが込み上げてくるのを必死に堪える・・・うう・・・
だめだっ！

俺は目を開けてガバツと起き上がった。

その瞬間、俺の顔の至近距離に奈緒の顔が見えた。

幻覚？いや、そんなことはない。よくあることだ。

起き上がった勢いで額と額がもろに激突する。その瞬間、喉まで
こみ上げてきたものを驚きのあまりの飲み下してしまった・・・

「いったあ・・・ひどいよ直君・・・たんこぶできちゃう・・・」
「わ、悪かった。でも、二日酔いで寝ている人間にあんまり顔を近づけるな・・・酒臭いだろっし・・・」
「そんなことないよ・・・直君だったら・・・」
「は？」

奈緒は一人でよくわからないことを言っただけ顔を赤らめている。

「大丈夫か？」
「大丈夫かじゃないっ！こっちのセリフだよっ！二日酔いは？」
「いや、たった今、吐きそうだったのが正面衝突事故のせいで波が去った・・・」
「じゃ、これ」
「おおっ！ソル ックッ！」
「ちゃんと先にウコンでも呑んでおけば良かったのに・・・」

甘えてばかりじゃ悪いんだけど、本当に面倒見のいい奴だ。奈緒がいなかったら俺の一人暮らしはもつと壊滅的な物となっていただろう・・・。俺はちゃんと奈緒離れして大人になれるのかどうか心配だ・・・。

「鍵、開けっ放しだったよっ！まあ、開いてなかったら部屋に入っ
てこれなかったから、今頃、直君は吐瀉物に塗れていたかもしれないけど・・・ああ、喉に詰まって窒息死って結構あるんだってね・・・」
「二日酔いの人間に吐瀉物とか連想させるなっ！」

俺はこんなだが、同程度は飲んでいたはずの奈緒はピンピンしている。肝臓の性能が違うのだろう。

ルマツクのお陰で、食堂から胃にかけてはずいぶんすっきりしてきた。

「はい。それから、ポカ ス ット。水分と糖分も取らないといけないんだよ。落ち着いたらご飯にしよう。シジミのお味噌汁作ってあげる。お母さんが送ってくれたんだ。直君と円ちゃんにも分けるって」

至れり尽くせり尽せりだ……。いかん……。こんなに依存してしまつていいんだろうか……

「何から何まですまんのお……」
「なにそれ」

そう言つてくつくつと笑つた。やっていることは母親みたいななのに、笑つてる顔は子供だよなあ……

ソル ックの爽快感が一段落したところで、ポリス ットのペットボトルを煽つた。

「ああ、そういえば円は？」

「そ、それがね……。帰つてきてないみたい……。ケータイにも全然でないし……」

「えっ！順平は？」

「順平君も出てくれないんだよお。大丈夫かな……」

本気で心配そうだが、こんだけ他人の事ばかり気にかけてて疲れないんだろうか……

「まあ、夜はまだ寒いって言っても凍死するような季節じゃないし、漫画喫茶なんか泊まって二日酔いになりながら寝ているだけだろう。着歴が残っているだろうから、そのうち連絡が来るんじゃないか？」

「そ、そうだよねっ！じゃ、御飯作るね。横になっていいよ」

「いや、なんか手伝うよ」

「いいのいいの。どうせたいした役に立たないんだから」

「ぐっ……」

ふと思う……新婚夫婦みたいだ……。いや……。何考えてるんだ俺……

おはようございます。いえ……。こんにちわ。円です……

私……。なんでこんなところにいるんでしょうか。って言うか「こじこじ」？

それに、どうやらパンツしか履いてないみたいなんだけど……

うーん、それほど部屋は広くないのに、やたらと豪華なベッド、有線放送のBGMが控えめの音量で鳴りっぱなし、お風呂と思われるところの壁がなぜかガラス張り……

これってつまり……

つまり……

いわゆる・・・ブティックホテルって奴ですよね・・・通称ラブ
ホ・・・

そして、隣には恐らくパンツ一丁と思われるあいつがいる・・・
寝ているけど・・・

とりあえず・・・起きて服を着よう・・・なんだか、部屋の各所
に散乱している・・・
よっこいしょ・・・

ふにゆ・・・

『ふにゆ？』

ベッドサイドの棚に手を付いたら妙な感触が・・・

これは・・・これは・・・この・・・ラテックス製の袋は・・・
中に入っている白い液体は・・・つまり・・・

え、ええええっ!!!!

・・・

『ロストバージン・・・記憶なし・・・』

私は思わず、ヘタリ込んでしまった。酒の失敗はこの一年数知れ
ずあるけれど、これは極めつけだ・・・。

記憶を辿ってみよう。

一昨日、『えふたま』で順平に告白された。考えてもいなかった私は、その場は適当にお茶を濁して『考えてみる』って答えたんだけど、なんだかずつと気まづくって、直人と奈緒も何かあったことは気づいていたみたいだった。

で、昨日はとりあえずそういうことは忘れて、北川姐さんと一緒に大盛り上がり。焼酎じゃないから大暴れはしないだろうと思って、だいぶワインを呑んだ。ワインを飲むと大人しくなるって奈緒が言ってたからなんだけど・・・

カラオケを出たあと、気づくと順平と二人になっていたのは記憶がある。順平もかなり酔っていたな。

・・・

・・・ああ・・・私がここに誘ったんだ・・・眠いとか言って・・・

その後は記憶ないんだけど・・・順平のことは責められないよね・・・あんだけ酔っていたのにちゃんとゴム使っている分だけ、しっかりしていると思うし・・・

そうか・・・私・・・ワインで酔うとおとなしくなるけど・・・大胆になるんだ・・・

とりあえず、冷静になろう。すんだことはしょうがないんだから。覚えてないってのは酷いけど・・・。

しっかし・・・酷いなあ・・・入り口からベッドにかけて、上着から順に服が脱ぎ捨てられている。部屋に入った瞬間からベッドに入るまでに全部脱いだのか・・・。

とりあえず、服を来た。順平の服はベッドの近くにまとめられている。ああ・・・たぶん、私はベッドに辿りつくまでに勝手に脱いだんだな・・・

って言うか・・・押し倒したのかも・・・私が・・・うつすらそんな記憶が・・・せめて、順平の服は畳んでおいてあげよう・・・

あら？

ジャケットのポケットからなんか落ちた・・・バイトの給与明細みたいね・・・

・・・

「えっ？ええっ！！？」

思わず大きな声を上げてしまったのは、雇用主の箇所に書かれているお店の名前が、私が出禁になっているカラオケボックスのものだったからだ。

それだけじゃない。

「何この『機材弁償代』って・・・バイト代の半分も引かれているじゃない・・・」

さらに、明細と一緒にメモ用紙が入っていた。

『お疲れさん。自分のせいじゃないのに、一年間もよく頑張ったよ。あの娘の出禁も解除するから、今度一緒においで。酒の飲み方はちゃんと教えてあげてな』

これって……つまり……

『目標金額に届いたから』って……

「っう……っう……頭いてえ……んっ！」

順平が起きた。順平はパンツすら履いていなかった。私に気づいて肌掛けで下半身だけ隠す。

「え、あ……あぁっ！す、すまんっ！酔った勢いとは言え……いや……実はあんまり憶えていないんだけど……すまんっ！とにかくすまんっ！」

いや、そんだけ謝られるとこっちも困るんだけどなあ……

でも、その話の前に私は順平に聞かないといけないことがある。

「順平……これ……どういう事？」

「へ？」

私は明細とメモ書きを一緒に差し出した。

「……………いや……………その……………」

「これって、私が去年大暴れして部屋ごと壊しちゃったカラオケボックスだよな？」

「そ、そうだけど……………ほら、その後、別の奴らと行ってさ、俺も悪酔いして壊しちゃったんだよっ！」

「うそつくなっ！」

「ひっ！」

私の剣幕に順平はおののいた。いや、奈緒には男相手には抑えるって言われてはいるんだけどさ……………

「『自分のせいじゃないのに』とか、『あの娘の出禁も……………』って、どう考えて私のことじゃないっ！」

考えて見れば、弁償しないで済む話じゃなかった。あの時は、カラオケの機械だけじゃなく、部屋のドアからガラステーブルから破壊しつくして、壁にもあちこちに穴を空けたし、身の危険を感じた他のお客さんはみんな帰ってしまった。

私をお持ち帰りしようとして、ボコボコにした先輩達が弁償したって話も聞かない。

「みんなに内緒で一人で全部……………私のしたことを被っていたの？」

「……………」

「ねえ！答えてよっ！」

「……………そうだ……………」

「やっぱ……………」

「なんでよっ！馬鹿みたいっ！私なんにも知らなかったんだよっ！」

私のためにこんなに無理して・・・バイトで無理して一年目から単位落としていたじゃないのっ!」

私のせいだったんだ・・・。

「黙っていて悪かった・・・」

「違うっ!謝ってなんて欲しくない・・・」

じゃあ、どうしてほしいんだろ・・・なんだか涙が出てきた・・・

鈍いのは直人だけじゃない・・・私も一年間、全く気づいていなかったんだ・・・

・・・

でも・・・甘えっぱなしだったなんていやだっ!私は直人じゃないっ!

「順平っ!」

「は、はいいいいっ!」

「何びびってるのっ!順平が一年目で落とした単位は?」

「へ?」

「いいからっ!」

「ええと・・・語学は直人のお陰でどうにか・・・専門の基礎科目もどうにか取れているから・・・教養科目でだいぶ落としたから、今年はぎゅっぎゅっ詰めだけど、取りきれるかどうかは・・・」

なるほど。教養科目は考えてみると、私と同じのを取っている。

私にあわせてたんだ・・・バイトででてないことは多かったけど・・・

。

「わかった。じゃあ、あんたの取り損なった単位の習得は私が協力するわっ！前期試験前は泊りがけで勉強っ！それから、出席が足りなかつたら試験でいくらやっても無駄っ！その辺は私が管理するからねっ！引きずってでも、講義につれていくからっ！」

「あ．．．あう．．．は、はあ．．．」

順平はあっけに取られていた。我ながらずいぶんと強引だけど．．．
．．．だけど．．．

もう、いいと思った。いろいろと。私はもう一度、服を脱ぎだした。

「え？は？ま、円？」

全部脱ぎ終わってから、順平の上に跨る。きつと一回目も同じようにしたんだろう。自分の行動にかすかな既視感があった。

「順平？昨日っていつか．．．もう今朝の事だったと思うけど．．．覚えてる？」

「ええと．．．つまり．．．ああ．．．いや．．．覚えてない．．．」

「私も．．．始めてなのに．．．勿体無いじゃない．．．」

「．．．」

「だから．．．もう一回．．．???」

こんにちわ。奈緒です。私は円ちゃんがあんなことになっているなんて、この時は知る由もありませんでした。

でも、私と直君はこっちはこっちでちよつと……。

「なつ、直君……だめだよ……そんな……」

「ダメって……俺と奈緒の仲じゃないか……」

「そうだけど……恥ずかしいよ……」

「大丈夫だ……優しくするから……」

直君の方からこんなこと言ってくるなんて……

「ん……あ……くすぐりたい……」

恥ずかしくて、顔から火が出そう……

「こらっ！奈緒っ！変な声出すなよ……まったく、いい歳して自分で耳かきもできないって……」

「だって……見えないから怖いんだもん……」

「ほれっ！確かに恥ずかしいぐらい耳かすが溜まっているぞっ！」

「やめてよ〜」

「まあ、普段世話になりっぱなしだから、これぐらいは俺がやってやるよ」

「はずかしいよ〜」

なんだろう……膝枕なんて、なんだかうれしいんだけど……後頭部になんだか堅いものが当たっているような……ま……いいか……直君がこんなことしてくれるなんてうれしいから、細かいことは気にしないっ！

黄金連休はお花見の季節 その3（後書き）

島「今回・・・やたらと恥ずかしい話だな・・・」
詩織「でも、早くも新カップル誕生ですよぉ〜おめでとぅぉ〜」
神林「きつと、書いている作者が一番恥ずかしいだろうなあ・・・」
純菜「でも・・・明らかに前回の後書きから狙っていたよねえ・・・
でも、オチはベタすぎでしょ」

純菜さん。おっしやるとおりです。でも、本当に書いていて恥ずかしい・・・。

〜次話予告〜

「ふむ・・・つまり・・・テーマは何も考えていないが、色恋沙汰に現を抜かしていた訳だな・・・二年は・・・」

「こ、小比類巻さん・・・」

「いや、別に色恋沙汰が悪いと言っているわけじゃない！だが、それはやることをやってからだろうっ!？」

「でもぉ・・・テーマの話をした当日に不埒な目的で飲み会開いたのは小比類巻さんですよねえ？」

「し、詩織・・・」

「詩織ちゃん、相変わらずのんびりきついこと言うよね・・・」

語り手は島君の予定です。

〜お願い〜

お気に入り登録、ご評価、ご感想をお待ちしております。
厳しいご意見もドシドシお願いいたします。

恋愛の定義 その1（前書き）

（前回までのあらすじ）

連休中、一年前に騒ぎを起こしたカラオケボックスへの弁償を、順平が一人で背負っていたことを知った円は、順平の告白を受け入れる。

二日酔いで身動きを取れなくなっていた直人とは、奈緒が実家から持ってきたというシジミを持って現れる。

二年四人の男女関係はどうなっていくのか・・・

恋愛の定義 その1

「ふむ・・・つまり・・・テーマは何も考えずに、色恋沙汰にうつつを抜かしていた訳だな・・・二年は・・・」

「こ、小比類巻さん・・・」

「いや、別に色恋沙汰が悪いと言っているわけじゃない。だが、それはやることをやってからだろうっ!？」

「でもお・・・テーマの話をした当日に不埒な目的で飲み会開いたのは小比類巻さんですよねぇ?」

「詩織ちゃん、相変わらずのんびりきついこと言うよね・・・」

小比類巻さんが恐れおののく。実を言えば現役の学生で唯一小比類巻さんに対抗できるのが詩織だったりする。

実際、ゴールデンウィーク明けにちゃんとテーマが決まっていたことなど一度もないのだが。大体は夏休み明けにやっと決まるわけ。

年末から年度末にかけて、徹夜を研究を続けて終わらすというのが毎年のことなのだ。

ああ、名乗るのを忘れてたが、前学生独立研究室長のしまぎし島聖史だ。

こうして、二年を抜いたクラブメンバーで会議をすることになったのは、ゴールデンウィーク中、先輩にテーマについて相談する必要があるはずの二年が、一度も研究室に顔を出さなかったからだ。

北川が個別に電話をしてわかったのは、いつの間にか篠塚と東山がくっついて、休み中はすっかり色ボケ生活を送っていたことと、新橋がノロウイルスに感染し、彩原はつきつきりで看病していたた

めででてこれなかったとのことだ。

どうやら、ノロウイルスは彩原の実家から送られてきたとか言うシジミが原因だったらしい。味噌汁にしたと言うが、ちゃんと火を通せば大丈夫らしいので、シジミを触ったあとに、ちゃんと手を洗わないで他の食材に触れたりしたのではないかと思われる。

同じものを食べたのに、新橋だけが発症したのは二日酔いで抵抗力が落ちていたためだろう。

ちなみに、新橋が下痢でのたうちまわっていた間、同じアパートの並びの部屋に住んでいるはずの篠塚は、毎日、東原の家に泊まっていたために、全く気づかなかったとか。

着替ぐらいは取りに来たんだろうが、まあ、新橋は寝こんでたわけだし、彩原も余裕がなかったので気づかなかったのだろう。

様子を見に来たり、携帯の着歴を見て連絡ぐらいよこすのが筋だったのではないかと思うが、下手すると、仲良し四人組の友情に亀裂が入るかもしれん。

それはさておき、まあ、小比類巻さんのご立腹も、連休明けにテーマが決まっていけないのも毎年のこと。

そして、研究テーマが決まっていなくても、クラブのメンバーにはやるべきことがあるわけで、そっちの方が今は重要なわけだ。

仕事もあるみたいなので、小比類巻さんには早々に帰っていただいて、二年へのお説教は我々で行うこととしよう。

「すみませんでした！」

なぜか四人を代表して頭を下げたのは病み上がりの新橋。

まあ、これも毎回のことで、根暗と言われる彼だが、意外と責任感強い。私生活はかなりいい加減で、幼馴染だという彩原にずいぶん助けられているようだが・・・

実際、新橋は病欠だったわけだし、彩原もまあ付きっきりというのは過保護と思うが、理由としては正当性がある。ダメなのは、愛欲にまみれた生活で墮落しきった二人だな。けじめがついてない。

俺と詩織は形としては一応もう引退していることになっているので、二年への指導は神林と北川の仕事。

俺はあまり口を出さないようにして、フォローはのんびりした口調で場の空気を（読まずに）和らげる詩織の方があっている。黙っていることしよう。

「一応、こういう部屋と機材を自由に使えるのには、それなりの義務があるってことは自覚して頂戴。もちろん、研究は年度末に成果が上がっていればいいんだけど、一応、私たちはみんなにアドバイスしようと思って、出てきていたんだから・・・」

「北川の言うとおりだ。まあ、終わったことはしようがないとして、ええと・・・」

「とりあえず、ゴールデンウィーク明けからは、頭数のたりてない科目の実習助手のアルバイトと、夜間のパソコン教室の監視のアルバイトに人数を出さないと行けなくなっているわ。実習助手の方は二年ができるのは一年の実習だけだし、講義が重なっている時は無

理だけど、パソコン教室の監視の方は二年中心で頼むわよ」
「・・・」

相変わらず、神林は自分の言うべきことをすべて北川に言われてしまっている。

と言つても、北川は見た目は姉御肌でも、神経質なので、もし室長の立場になったら、夜も眠れなくなるだろう。

後輩の指導とか演説は北川に任せておいて、他の責任ある部分を神林が担当してくれればいい。詩織と俺で決めた人事だ。

「はい、お説教は終わりましたかあ？シフォンケーキを焼いてみましたよ。みなでお茶しながら、お話をしましょうね」
「あ、じゃあ、紅茶入れますね。今日はダーズリンにしましょう」

詩織・・・さすがだ・・・いやなムードを一気に明るくする間延びしたセリフっ！まるで天使のような・・・

いや・・・ごほん・・・失礼。

うまく調子を合わせた彩原もなかなか。クラブは変人が集まりがちなので、こういうコミュニケーション能力の高い人材は重要だ。

「うわあ・・・詩織さん！デコレーションがすごいかわいいですねえ！お菓子づくりも得意なんですね」

「あら、奈緒ちゃんのおいれしてくれた紅茶も美味しいですよ。私がいれたらこんなにおい香りしないですよ」

詩織と彩原の平和な会話のおかげで、まずまず雰囲気は良くなつたようだ。こういう事は女性の方がうまく対処してくれる。

東山なんかは、こういう時によく不機嫌になるが、さすがに今回は自分を恥じているようだ。まあ、照れもあるんだろうが・・・ああ・・・半同棲とかについては、何も言うつもりはない。

俺もやっていることだし。

「ところで、これから実習助手とパソコン教室の監視のアルバイトのことを決めるってことでしたけど、他にもそういう義務ってあるんですか？」

ふむ。真面目な話のきっかけを作ってくれる点、これも新橋君のいいところだな。

「基本的にいざという時に頼みごとをしやすいつて言うのが、この先生方にとつての存在価値だ。研究の手伝いとか、学会の運営の手伝い、実習の課題づくりとか毎年いろいろ出てくるが、主なところでは後は春の新入生向けの合宿オリエンテーションの実行委員ぐらいだ。それも、人数がたりてない時だけだな」

「今年は人数が足りていたから合宿オリの実行委員の話は来なかったのよね。で、全部ちゃんとアルバイト代が付くから、直人は生活の足しにするといいわ。時給も普通のアルバイトに比べて破格の待遇よ」

俺の言葉に続けて答えたのはやはり北川。神林はまあ大して話さなくても、どつしりと構えてくれていればいい。それで十分存在価値があるから。

「ええと・・・申告してもらった時間割からすると・・・順平には実習助手は無理ね。全部教養の授業で埋まっちゃっているから・・・夜の監視の方は？アルバイトとか入れてる？」

「火曜日と木曜日以外は大丈夫ですよ。バイト減らしたので」

「よし、じゃあ、月水金のどこかね・・・他の人は？」

「俺はどこでも大丈夫です。他にバイトする予定もないし」

「私も大丈夫です」

「私も」

「じゃ、パソコン教室の監視は二年でお願いするわ。これで足りない人員はうまるから」

北川が要領よくシフトを組んでくれる。こういう事務能力は本当に高い。

「基礎プログラミング実習Aの実習助手は・・・ああ、これ私と神林もやるけど、あと二人ね・・・奈緒ちゃんと直人でいいかな？」

「了解です」

「あとは・・・データベース基礎演習の実習助手・・・これは神林ともう一人・・・円がいい？」

「はい」

ふむふむ。意外と簡単に決まりそうだ。ああ、重要なことを話さねばな・・・

「ちなみに、実習助手はただアルバイトとしてやるだけでなく、見込みありそうな新入生を見つけるといふ重大な意味がある。つまり、優秀な後輩をこのクラブに勧誘する場としても活用する必要があるから、目を皿にしてそういう人物を探すように」

Kクラブに所属する学生は有志の集まりではあるのだが、サークルと違ってポスターとか張って募集を書けるわけでもないし、リテラシーに劣る学生が入ってきてても意味が無い。そのため、実習の場で力のある学生を見つけて勧誘することになっている。新橋達が年末になってから入ってきたのもこのためだ。

ちなみに、今の二年もそれぞれにそれなりの力があるので、勧誘して所属を認めたのだ。

まず、神林が基礎プログラミング実習Aで、課題が終わったあとの時間つぶしに、シューティングゲームを作って遊んでいる東山を見つけてスカウトしてきた。

そして、東山が『こいつもできる』と言って、新橋を連れて来る。

北川が女の子も勧誘しろと言ったところ、新橋が高校からパソコン同好会で一緒にやっていたと言って、残り二人を連れてきたのだ。

それぞれに、光るものを持っている。この先が楽しみだ。

さて・・・とりあえず、決めないと行けないことは決まった。待ちぼうけを食らった三年二人と二年の関係修復は、詩織と彩原の協力でどうにかできそうだが・・・気になるのは二年生どうしの関係だな・・・。ここは、先輩として・・・。

「ところでだ」

「はい？」

「飲みに行かないか？」

人間関係の構築の基本は飲み二ヶーションだ。

「さとちゃん・・・みんなお酒にまみれ過ぎだよ、さとちゃん自身も最近飲み過ぎ」

「島さん、俺、病み上がりなんで無理できないです。薬も吞まないといけないし・・・」

・・・う、うかつだった・・・まあ、でも、お酒じゃなくてもいいか・・・

「あと・・・じゃあ、『えふたま』で晩飯つてことどうだ？二年の分はだそう」

「ああ、 Pastaなら大丈夫です」

「そっちの方がいいよ。さとちゃんえらいえらい」

というわけで、とりあえず、全員参加で『えふたま』行き決定だ。

『えふたま』は、食事をすればコーヒ飲み放題だし、酒も置いてあるし、パフェとかクレープとかスイーツも充実している。趣味趣向の多様な学生がみんなダベリングするには実に便利なお店だ。

「で、ところで・・・いつのまに二人はそんな仲に？」

『えふたま』に移動して、それぞれに注文を終えたあと、飲み放題のコーヒを口にしながら、東山と篠塚に話しかけたのは北川だ。

確かに、これこそが今最もホットな話題だ。

「え……あの……」

篠塚には珍しく顔を赤くして言いよどむ。

「あれだな……花見の後か……いつの間にか居なくなっていた時だな？ やっぱり、ホテルにしけ込んでいたのか？」

神林よ……お前は鋭いが、気づいたことをすぐ口にしすぎる。

北川以外の女子三名が冷たい視線を送っているぞ。

「えっと……まあ、そんなところで……」

そうか……認めてしまつのか……東山よ……

「ま、円ちゃん……そんな……」

いや、話が恥ずかしいのは、彩原のことだからわかるが、なぜ震えている？

「私……円ちゃんがそんな娘だなんて思わなかった……」

「へ？ いや、奈緒ちゃん……子供じゃないんだから……大つぴらに言うのはどうかと思うけど、別に……」

「ああ、北川さん、気にしないでやってください。精神年齢が幼いだけですから。奈緒は」

「直君ひどいっ！」

「まあ、お子様だからしかたないねえ……」

「何その優越感に浸つたような顔は……自分だけ大人になったみたいな感じ？ 円ちゃんイヤラシイよ……」

まあ、篠塚がやらしいのは確かだろうが……ごほんごほん……

「でも、円には一つだけ言うておくわ。あんまり簡単にさせてちゃだめよ。我慢させることもしておかないと、男を墮落させることになるわ」

「自分が墮落しちゃうこともありますけどねえ」

おい……そういう会話は女同士だけの時にしろよ……

「ところでさ……円と順平が付き合い始めたのはわかるけど、直人と奈緒は結局どうなってんの？」

北川よ……ストレート過ぎるぞ……

「へ？何がですか？」

「だって、連休中も奈緒がつきつきりで直人の看病をしていたんでしょ？」

「まあ、そうですね。幼馴染で家が隣だから……」

「いや、それで単なる幼馴染とは言わないんじゃない？二人つきりで四六時中一緒にいたんだから」

「そうですね……それで何もなかったのお？奈緒ちゃん？」

おいおい、うちの女どもはどうしてこう男の前でも下品な話題で盛り上がるのか……

「ええと……何あるんですか……？」

わかってねえのか……その歳で……

「だって、奈緒ちゃんは直人のこと好きなんじゃないの？」

おいおいっ！当事者の前でそこまで聞いちゃマズイだろっ！北川っ！

「えっ・・・いや・・・そ、そんな・・・子供の頃からずっと仲よかつたっただけで・・・」

しどろもどろだな。分かりやすいぞ。彩原。

「まあ、なんていうか、兄弟みたいなもんです。別にそっちの二人みたいに色ボケしていたわけじゃないですよ」

「ふ〜ん・・・そう言うのもあるのかなあ〜・・・でもお・・・嘘は言ったくないと思うんだけど、ちよつとだけ話しに違和感があるよ
うな気がするなあ・・・」

「へ？何がですか？」
「う〜ん・・・よくわからないけどお、『色ボケ』って言った後にちよつとだけ間があったから」

詩織はそういうことに妙に敏感だ。ふむ・・・決定的なことはなくても、多少はラブラブなことがあったということか。

「なんにもありませんよ。ただの幼馴染です。面倒ばかり掛けて申し訳ないとは思ってますけど・・・」

ふむ・・・話をしらせさせるのもうまいな。新橋よ・・・。

だが、今の話で彩原はテンション落ちているな。切なそうな顔をしておるぞ。

「いくら、幼馴染で中が良くても……こんな可愛い娘と密室で二人でいて……込み上げてくるものとかはないの……?」

おい……詩織……間延びした口調はそのままに、キャラクタ―が崩壊するようなセリフを言うな……

「子供の頃から一緒に育ったから。本当に兄弟みたいなものですよ。妹と二人でいてそうなるかっていう話です」

新橋の言うことはわかる。が……相手もそう思っているかどうかはまた別の話だな。

「奈緒ちゃんはず直人君が動けないうちに襲っちゃえばよかったんだよ」

「詩織さ……下痢でのたうち回っている男相手にそんな気は置きないと思います……」

突っ込んだのは北川。彩原は耳まで真っ赤にしてうつむいてしまった。ちよつとだけかわいそうだ。

「とりあえず、少なくともそういう話は……同性だけで、なによりの一方の当事者がいないところとするものだろう?」

「言われてみれば……」

言われなくとも気づけよ、北川……。

「じゃあ、この後、女子だけで飲みに行かない? ご飯は食べたから……ああ、ブラウンでカクテルとかどう?」

「いいですねえ」

「おいおい……さっきは酒にまみれ過ぎだから控えろと言ってな

かったか・・・」

詩織に向かって、半眼で言う。

「男の子達は、直人君は病み上がりだし、さとちゃんは一人でも毎日晩酌しているから、これ以上はだめです」

「女の子も呑むっていつても、いっぱいにはいですよ。ガールズトークが目的ですから」

「ガールズトークって歳かよ・・・」

「ん？さとちゃん？誰のことを言っているのかな？」

「なんでもありません・・・」

結局食事を終えた女子達は、男どもを置いて、ぞろぞろと少し離れたところにあるバー、『ブラウン』に連れ立って行ってしまった。

残された男四人、酒を呑むと言われた我々はどうするのか・・・

「四人ですか・・・できますかね・・・」

ぼそり、と神林が言う。

「そうか・・・だが、東山と新橋はどうだ？」

「ええと・・・なんででしょうか？」

「四人で卓を囲む男の遊びだ」

「俺は大丈夫ですよ。直人もわかるはず。部屋にパイとかなかったけ？」

「ああ、ありますよ。でも、俺の部屋はノロウィルスに汚染されているかもしれないよ」

「まあ、大丈夫だろ」

というわけで、男たちは新橋の家へと消えていった。

恋愛の定義 その1（後書き）

（次話予告）

「さて・・・じゃあ、始めましょうか・・・」

「な、何を始めるんですか？」

「結局、奈緒ちゃんは直人くんをどう思っているの？」

「ああ、先輩方、奈緒が直人を好きなのは間違いないです。問題は、なぜちゃんとはつきりとさせようとしなやかでしよう？」

「そうですね」。強引に迫れば、簡単に落とせそうな気がしますよ」

「し、詩織さん・・・」

（お願い）

お気に入り登録、ご評価、ご感想をお待ちしております。

厳しいご意見もドシドシお願いいたします。

恋愛の定義 その2（前書き）

（前回までのあらすじ）

二年と三年の仲直りのために島が設定したえふたままでの食事。その最中に話題は円と順平の馴れ初めから、奈緒と直人の関係に移る。

詩織と純菜は奈緒の本音を聞き出すために女子だけで、バーで二次会を行うことにした。

それに対して、島と神林は女子に酒をとめられたため、直人の家で麻雀をすることを提案する。

さて、直人と奈緒の本音はどこまで引き出されるのか・・・

恋愛の定義 その2

「さて・・・じゃあ、始めましょうか・・・」

「な、何を始めるんですか？」

「結局、奈緒ちゃんは直人くんをどう思っているの？」

「ああ、先輩方、奈緒が直人を好きなのは間違いないです。問題は、なぜちゃんとはつきりとさせようとしなやかでしよう？」

「そうですね、強引に迫れば、簡単に落とせそうな気がしますよ、」
「し、詩織さん・・・」

全員の注文がテーブルに並んだところで、純菜さんが奈緒に切り出した。

「こんばんわ。円です。」

大事な話は女の子だけで。ガールズトークっていくつになってもいいものだ。それに、照れくさいけど、急展開で正直焦ったけど、私には彼氏ができちゃった。こうなると、やっぱり奈緒にも幸せになつてほしい。順平の言っていた、私だけ残して、という状態ではなくなつたわけだから、奈緒だつてちょっと違う気持ちになつていゝるんじゃないかと思うのだけど・・・。

「直君は・・・私のことそういう風に見てないから・・・」

「えっ？」

「さっきだつて、妹つて言つてたじゃないですか・・・」

「奈緒ちゃん・・・」

奈緒のテンションは楽しいガールズトークなどというノリではなかつた。とつても、切なくて悲しそうな・・・。

「でもお・・・それは、今、意識してないってだけで、本当の妹
ってわけじゃないんだから、これから意識させてしまえばいいだけ
ですよ。直君は奥手かもしれないし、身近すぎてそういう感じ
になってないかもしれないけどお、奈緒ちゃんに『女』を感じる夕
イミングがあれば、そんなものいくらでもかわるよ。」
「そうだよ。他に誰か好きな人がいるとか、そういうわけじゃない
んだからさあ・・・。」

先輩方二人の言うことはもつともだ。何より、私は奈緒がずっと
直人のことを好きだったのを知っている。なんでそんなに我慢して
いるんだろう。

「奈緒・・・ずっと、直人のこと好きだったでしょ？」

「えっ!？」

「いや、今更何驚いているの・・・何年付き合っている思っている
の・・・。」

「だって、一回もそんなこと言ったことないし・・・。」

「態度見ていればわかるよ。それに、あんた結構告白されているの
断ってたし、一回は・・・実は見ちゃったこともあるんだよね・・・。」

奈緒は顔を真赤にしている。

「知ってたんだ・・・。」

「うん・・・。」

「なんではつきり言わないの？高校三年間だっていくらでもチャン
スはあったわけだし・・・。」

「・・・。」

奈緒は何も言わずに黙ってしまった。

「ねえねえ、私たちにもさ、その高校の頃の話教えてよ・・・」
「そうですねえ。こう見えて人生経験豊かな先輩なんですよあ〜。
良いアドバイスできるかもしれないから、包み隠さず話してくださいねえ〜」

明らかに先輩方はアドバイスをしようというより、好奇心いっぱいって感じた。そもそも、詩織さんは同棲しているとは言え、なんだかそういう真剣な相談とかできそうな感じじゃないし、純菜姐さんは彼氏いるって話は聞かないし・・・

まあ、でも、奈緒のことを知ってもらうのはいいか・・・。

「じゃあ、ちょっと長い話になりますよ」

私は高校時代、偶然、告白の現場を見てしまった時のことを話した。奈緒は相変わらず顔を真赤にしてうつむいている。

「と言うわけです。まあ、この男は顔だけで性格悪い勘違い野郎でしたけど、他にも結構人気の男子から告白されていたんですね」
「しよ、しよ〜かつ！奈緒ちゃんもつたいにゃいぞつ！そんな、かあ〜いいのにい・・・ヒック・・・ロリ好きの男の子のにゃかから〜・・・いい男選び放題っ！」

「詩織さあ〜ん、奈緒ちゃんはある、直君がだあ〜すきなんですからあ〜・・・、他の男なんて選べないんですよ・・・うつぷ・・・」

私の話の間に、二人共すっかり出来上がっていた・・・。一杯二

杯って話だったのでは・・・

「う、うう〜ん・・・奈緒ちゃんを酔わせて全部吐かせようと思っ
たんかけど・・・無理だ・・・」

「まだ分かってなかつたんですね・・・奈緒の酒豪っぷりには誰も
かないませんよ・・・」

「ねえ〜ねえ〜・・・直君はあ〜・・・ロリっ娘はあ・・・嫌いな
のお〜？」

そうかつ！こ、これは重大な疑問だつ！

「そうですっ！そう、そうそれっ！う、うつぶ・・・」

「じゅ、純菜姐さん・・・大丈夫ですかっ？」

「だ、大丈夫・・・これ話したらトイレ行くわ・・・奈緒の最大の
魅力は・・・間違いなくそのロリっぶりっ！それを活かせるかどう
かが重要よっ・・・じゃあ・・・うつぶ・・・ひう・・・行ってき
ます・・・」

北川姐さんはトイレに駆け込んでいった。しばらくは帰ってこな
いだらう。

「で、どうなのお〜？」

詩織さんは頬杖を着いた姿勢から、自分で腕枕をした状態でヘタ
リこんでいた。

「ろ、ロリっ娘って・・・」

「いや、それは否定出来ないでしょ・・・自分の魅力は否定するも
のじゃないわ。素直に認めなさい・・・」

「ねえ〜直君はそこんことおなのお〜・・・？」

さて、どうだったかしらねえ・・・あいつ恋愛の話なんてしたことはないし、芸能人も詳しくないから好みとか全然わかんないわ・・・

直人の部屋には緊迫感が漂っていた。先輩たちが二人共洗面で考え込んでいる。その視線は直人の指先に集まっていた。

あ、どもです。順平です。考えてみると始めて語り手やります。

女どもがまとまって飲みに行ったので、男は男同士で楽しめることをしようってことで、直人の部屋で麻雀大会になっているんですが・・・

「ツモっ！四暗頂単騎っ！」

パシッ！

直人が勢い良く牌をマットに叩きつけた。続けて手を晒す。正しくスーアンコウ。役満だ・・・

「ま、またかつ！またハコだっ！」

「どうなっているんだっ！この病み上がり男はっ！」

先輩方は多少の自信があったのだろう。まだ、身入りの良いバイトをしていない直人のために、支払いは分割でOKという条件を出していたのだが、そんな必要は全くなかった。二人はもうツンツルテンにされている。一方俺はどうかギリギリ持ちこたえてトント

ンと言うところだ。

直人とは一回だけ麻雀をやったことがある。二年メンバー四人でだ。実を言えば女子二名も異常に強い。その時は俺がツンツルテンにされていた。今回は警戒して、先輩方に餌食になってもらったのだ。

「ぐずつ・・・もう種が尽きた・・・」

「ああ・・・詩織に怒られる・・・」

先輩方はまあ身入りの良いバイトでずいぶん稼いでいるから、これぐらいでは大丈夫だろう。負けを受け入れられる人が負けるといふのは、ずいぶんいいギャンブルだ。

「だめだ・・・もうやめよう・・・俺達と言えどこれ以上はキツイ・・・」

「そ、そうっすね・・・直人、順平、もういいだろ・・・」

島さんはすっかり落胆している。詩織さん・・・見た目や喋り方から想像付かないけど、家に帰ると結構キツイらしいからなあ・・・思わず合掌。

「ああ、これで病院代で削られた分が取り戻せてお釣りができました。ありがとうございますっ！ああ・・・やっとカップ麺生活から脱出できるっ！」

おいおい、ギャンブルでかっぱいだ相手に『ありがとうございます』は禁句だろうが・・・。

「じゃ、どうします？お開きにしますか？」

「うーん、せっかく男だけの集まりだ・・・男だけにしか出来ない話とか・・・男同士でしか楽しめないことをしよう・・・」

そう言い出したのは島さんだ。普段からバイト以外はずっと詩織さんと一緒にいるからそうなるのかもしれない。って、俺も似た様なもんか・・・。まだ十日程度だけど、結構野郎づき合いに飢えている。

「直人よ・・・お前も男だ・・・彩原とか篠塚とかがしょっちゅう来るから巧妙に隠しているだろうが・・・あるものはあるだろ？」

「へ？何がですか？」

「わからないでかっ！」

島さんの目が座っている。

「順平よっ！気づいているかっ！今のお前ならわかるはずだっ！」

分かってしまった自分が・・・

「確かに・・・女に入り浸られると、見るに見れないあれですね・・・」

「そうだっ！直人も確かに彩原に入り浸られているようだが、それにしたって同棲しているわけではないっ！俺らに比べればいくらでも『イツツア・オトコノコ・タイムツ！』があるはずだっ！」

島さん・・・呑んでるわけじゃないですね・・・。

「島さん・・・搜索を開始しましょうっ！東山一等兵っ！新橋二等

兵を拘束せよっ！」
「イエッサーっ！」

う、思わずのってしまった。が、ここまで来たらやるしかない。

「こ、こらっ！順平っ！や、やめろっ！先輩方も漁らないでくださいよっ！」

俺は直人を羽交い締めにして、ベッドの上に抑えつけた。

「どこだ・・・ないぞ・・・」

「彩原しよっちゆう来るんです・・・ベッドの下とか分かりやすいところにはないはず・・・部屋の掃除すら手伝ってもらってるってことですから・・・」

「そうか・・・じゃあ、キッチンとか彩原がよくいそうなところとか、むしろ彩原の領域ってところにはないな・・・」

「彩原が決して見ようとしらない領域・・・そうかつ！わかったぞっ！」

直人は意外と抵抗しない。これは、恐らく絶対に見つからないと思っているからだろう。だが、先輩方の執念と嗅覚は想像を超えたものだった。

神林先輩は突然、玄関に向かい外に走り出た。北海道では学生のアパートであっても、各部屋の入り口は建物の内側にある場合が多い。雪が降るので、階段が外に出ていたりするのは危険なのだ。こも比較的新しい学生マンションで、意外とセキュリティもしっかりしている。オートロックで郵便を各部屋にまで届けることは出来ないのも、一階の入り口にポストがある。

「し、しまったっ！」

ここに来て直人が焦りだした。さすがだ・・・神林先輩・・・恐ろしい勘の良さだ・・・普段はたいして役にたつてないけど・・・

程なくして神林さんは帰ってきた。手には紙袋を持っている。

「なかなか巧妙だったな。郵便受けに金属板で上げ底を作ってそこに隠すとは・・・」

「そ、そこまでやるか・・・いや、それが分かった神林さんはすごい・・・」

「何、女どもにはもちろん黙っておくさ。なっ？直人君の好きなやつをみんなで鑑賞しよう・・・」

そう、先輩たちが探していたのは、エロDVDだ。一人暮らしの男がお世話になっていないはずがない。ちなみに俺の場合は・・・円が始めて泊まった晩のうちにすべて発見され、廃棄されている。パソコンの中にためてあった動画まで気づいたらすっかり消去されていた・・・。パソコンに詳しい彼女というのは恐ろしい・・・。

ところが、直人はあきらめ悪く暴れ始める。

「や、こ、こらっ！開けるなっつー！」

礼儀正しいこいつが、先輩に敬語を使うことすらできなくなるとは・・・。どれだけ見られたくないんだ・・・よっぼど特殊な性癖でもあるのか・・・考えられる・・・

などと思っていたら、直人が俺の羽交い締めから逃れた。不覚っ
！だが……

「遅いわあっっっ！」

島さんが紙袋に手をつっこみ、中には入っていたDVDをパッケージごと取り出した。余程隠し場所に自信があったのだろう。そのままのパッケージに入れておくなど……女が出入する部屋なら、せめて別のケースに入れて置くのが常識だろうに……

島さんが右手で掲げたDVDのパッケージは一つだけ。大きな字でタイトルが書いてあった。少し離れた位置の俺にも読めた。

「ろ……ロリっ娘巨乳メイドXXXXXXXXXXXX」

後半はさすがに口に出すのも躊躇われたが……タイトルの下には女優であろう女の子顔がアップで出ている。さすがにロリだ……
というか……彩原に似ているっ！

「く……くそぉ……」

直人はずいぶん悔しそうだ。

「……なあ……直人……お前……やっぱり奈緒ちゃんが好
みなんだろ？」

「へっ？な、何ですか……」

「ロリっ娘だし……この女優……似てるぞ？」

「いや、でも……奈緒は違うでしょう……」

「違うって……」

島さんと神林さんが問い詰めているが、俺は気づいてしまった・

「そうか・・・ロリだけではダメなんだっ！『巨乳とメイド』かつ！」

「そ、それかつ！巨乳はともかくメイドは言えばやってくれるに違いないぞっ！」

「島さんっ！詩織さん、一時期やってましたよねッ！」

「そうだっ！あの店のアルバイトを奈緒ちゃんに紹介しようっ！」

後半はよくわからないが、先輩たちは大興奮だ。

「ふむ・・・しかし・・・意外とベタだったな。直人の趣味は・・・」

落ち着いてから島さんがボソリと呟いた。直人はガツクリとうなだれている。テレビには先程のDVDが再生されていた。写真ではかなり彩原に似ていたが、映像になるとそうでもない。

「いや、パソコンオタクがみんな萌え系メイド好きってわけでは・・・」

「何っ！東山よっ！認めろっ！お前だっ！メイドは好きだろうっ！」

「俺だっ！大好きだっ！詩織は自分で着てくれるから最高なんだっ！」

いや、ちょっと・・・島さん・・・

「いや、俺は別にメイドは・・・」

ほんとに対して興味ないんだよ・・・

「馬鹿なっ！もう円ちゃんにだつて着せてやってんだろっ！」

「は、裸エプロンしかさせてないですっ！」

「っ！！！」

急にみんな静まり返った。

あれ・・・なんか・・・変なこと言つたかな・・・

・・・言つたな・・・俺・・・

「そうか・・・僅か十日で裸エプロンプレイにまで辿りつくとは・・・やるな・・・東山・・・」

「円はなかなかその辺・・・予想通り大胆だつたか・・・」

い、いかん・・・ターゲットが俺に変わってしまう・・・

「と、と、ところで、結局直人は彩原好みなんだよなっ？理想はさらに巨乳じゃないといけないだろうが・・・」

「それほど似てないだろっ！」

「パッケージはクリソツだっ！」

「そうだっ！認めてしまえっ！そしてやってしまえっ！大人になるうよっ！苦学生っ！」

なんだか、変なテンションだ・・・

「妹のように思える・・・それを汚す背徳感ときたらたまらんだろ

うな・・・」

神林先輩がボソリという。

「なかなかいい趣味しているぞ・・・直人よ・・・なぜ認めてしまわないっ！見たところ彩原は全然OKって感じだぞっ！後ろめたいこともなく、妹とやれしまうなんて・・・」

いや、だんだん社会通念上やばい話になってきた気が・・・。

先輩方の煽りにも直人はずっと沈黙していた。しばらくしてからボソリという。

「恋愛なんて・・・する気もしないです・・・」
「？」

なんかやたらと真剣な顔だ。

「なんでだ？恋愛のない大学生活なんてつまらないぞ。俺が言うんだから間違いない」

いや、神林さん・・・

「いいんですよ。俺は・・・」
「直人・・・」

恋愛の定義 その2（後書き）

く次話予告

「奈緒はさあ・・・私よりもずっと直人の部屋に入り浸っているでしょ?」

「入り浸っているわけじゃ・・・掃除とか食事の準備とかたまたま手伝ってあげるだけで・・・」

「自分が全部やるのは手伝うとは言わないわよ・・・それは良いとして、発見したりしないの?」

「何を?」

「あれよ・・・」

「あれって・・・」

くお願い

お気に入り登録、ご評価、ご感想をお待ちしております。

厳しいご意見もドシドシお願いいたします。

恋愛の定義 その3（前書き）

（前回までのあらすじ）

バーに繰り出したクラボの女子メンバーはなんとか奈緒の直人への思いを叶えてあげたいと相談になるが、肝心の奈緒の反応がどうしても薄い。一方、麻雀ですっかり金を巻き上げられた島と神林、東山もどうにか直人から本音を聞き出そうと画策する。郵便受けに隠されていたエロDVDの写真が奈緒にそっくりだったことを糸口にしようとするが・・・

恋愛の定義 その3

新橋の部屋は妙にしんみりとしたムードになってしまった。誰も言葉が失った中、メイドの格好をしたロリ顔の巨乳女優のあえぎ声だけが響き渡る。

『あ、あああ・・・あう・・・あうっ・・・ああんう！・・・んくうっ・・・』

映像はクライマックスに近づいてきているが、誰もそれに耳を傾けてはいない。

どうも。今回は島がお送りします。

まったくもって妙な雰囲気になってまった。新橋の恋愛話は東山でさえ聞き出せたことはないらしいが、それをひよんなきっかけから口走らせたならこんなことに・・・。

「なあ・・・いったい何があった？」

最初に口を開いたのは東山。親友であるという彼はかなり真剣な表情で問いかけた。いや、俺と神林にしても、おちゃらけたことを言える雰囲気ではない。

「・・・・・・・・」

何もいわない新橋。よほど深刻な話なのだろう。

「しらぶじゃ言えないか？」

神林・・・いや、病み上がりだから酒はといていたのだが・・・。

「しらふで話してもいいですが、しらふの人間相手には語れません・・・」

ほう・・・そう来たか・・・俺は懐から、麻雀の負けを払って中身の乏しくなった財布を取り出した。とりあえず、五千円札が一枚は残っていた。それを出して東山に向かって言う。

「順平っ！これでサツ　ロソ　トトリ　ンナポ　ント・・・あとは・・・もやし三袋とベ　のジンタレを買ってきてくれっ！」
「し、島さんっ！そ、それは・・・」

これはただの呑み会ではない。クラブ伝統の宅呑み儀式なのだ。

「な、なんです？」

「これぞ・・・萌やし会っ！クラブ伝統の恋話呑み会だっ！」

「は、はあ・・・」

「酒はサ　ポロ　フトのりボ　ナポリ　割り。つまみはもやしのジンタレ炒めっ！それだけだっ！」

『サ　ポロ　フト』は札幌の酒造メーカーが作る安い甲類焼酎、
『りボ　ナポリ』は北海道限定で販売されている清涼飲料水で、
若干毒々しいオレンジ色の炭酸飲料だ。

安く手に入るもやしを、ジンパの後などによく残るジンギスカンのタレで炒めただけのものをつまみにする。これは、伝統あるイベントであり、いずれはどこかのタイミングで実施しなければならな

い。だからこれなら女どもにも言い訳は立つはずだっ！

「詩織さんに怒られても知りませんよ……」

あああ……うん。たぶん怒られる……いや……

「どうせあいつらも呑んでいる。詩織も純菜も一杯二杯でやめられるはずがない。今頃吐くまで飲んでいることだろう」

「まあ、確かに……」

「俺は呑めませんよ……さすがに」

白い目で俺見ながら新橋。

「ん？ああ、そこは無理せんでいい。ポリンでもやし炒め食せ！」

「奈緒はさあ……私よりもずっと直人の部屋に入り浸っているでしょ？」

「入り浸っているわけじゃ……掃除とか食事の準備とかたまに手伝ってあげるだけで……」

「自分が全部やるのは手伝うとは言わないわよ……それは良いとして、発見したりしないの？」

「何を？」

「あれよ……」

「あれって……」

円ちゃんの意味深なせりふに奈緒ちゃんがきよとんとしています。

そんなところもきやわゆいつ！じゃなかった・・・こんばんにや
くっ！詩織ですう！初語り手ですう！

で、初めてなのに、こんな泥酔状態でごめんによさい・・・。う
う・・・さとちゃんはこんなことで怒ったりはしないけど・・・呑
むなと言ったのは私なのに・・・。

まあ、そういうことは酔いがさめてから考えることにして。今は
奈緒ちゃんの話が大事ですねえ。

「ほら、男って必ずどっかに隠しているじゃない。私は初日に搜索
して全部捨てたけどね。パソコンの中のデータまで全部消してやっ
たわ」

ああ・・・つまり・・・あれですねえ。

「円ちゃん！甘いよあ・・・今はね、男の子はブラウザのシーク
レットモードを使ってそういうのを閲覧したりするんですよ。」
だからあゝ、私はルータのログまでチェックしてまあすっ！」

「え、あ、そ、そこまでやるんですか・・・」
「さとちゃんはたまにパソコンに詳しい彼女なんてか言いますけ
どねえ」

そんなこと言ってたって、さとちゃんは私のこと大好きだって知
っているから平気なんですよあゝ。えへへ。

あれ・・・奈緒ちゃん・・・まだわかってないみたい・・・。

「ええと・・・結局何のことなんですか？」

「ほんつとにわかんないの？」

「奈緒ちゃんかわいすぎっ！でもお、もうちょっと男の人のことわかっておかないとお、いろいろこまりますよお。男の子が必ず部屋のどこかに隠しているう。・・・恥ずかしい映像コンテンツのことですよお」

もお、ここまで言ってあげないと気づけないなんて。・・・奈緒ちゃんってホントにかわゆいなあ。

「で、見たことないの？」
「・・・・・」

奈緒ちゃん赤面。・・

「ある。・・・」
「ほう、よかった。・・・」
「よかったですねえ」

またきよとんとしてる。奈緒ちゃんは頭はいいんだけどなあ。

「な、何がですか？」
「いや、だから直人も普通にまともな成人男子なんだなあ。・・・」
「あ、そ、そうなんだ。普通なんだ。・・・良かった。・・・」

うーん、本当にもう少し、男性の生理現象を知つといたほうが良いような。・・・。

「で、どんなのだった？タイトルは？どこに隠してあった？」

円ちゃんは興味津々って感じ！きつと後日、自分で探してみる気ですね。・・・

「えっと・・・郵便受けに隠してあったんだけど・・・ろ・・・口
リっ娘巨乳メイドXXXXXXX・・・」

「っ!」

「っ!」

「っ、っ、これは・・・」

「ま、円ちゃん・・・まず、まず落ちつきましょ。冷静にその夕
イトルと奈緒ちゃんについて分析しましょっ!」

「そ、そうですね。まず、『ロリっ娘』の部分は奈緒は完璧にクリ
アしているはずっ!」

「そうですねっ!そして・・・巨乳は・・・」

うーん・・・体つきの割にはない方ではないけどなあ・・・

「し、詩織さん・・・詩織さんが言うところとだけ・・・嫌味で
す」

「そ、そうですね?まあ、そこはしょうがないとしてえ・・・
最後のキーワードは・・・『メイド』」

「なるほど・・・直人はメイド好きなのかあ・・・」

「さとちゃんもメイド大好きですよ。私はたまにメイド服着て、
三つ指付いてお出迎えることありますよ」

「それは、もう、詩織さんの趣味の世界なんじゃ・・・」

「昔、メイド喫茶でアルバイトしていたから、メイド服を持ってい
るだけですよ。かわいいんだからあ」

まあ、さとちゃんが喜んでくれるから、たまに着てみるんだけど
・・・。

「そうだっ！奈緒ちゃんって、今アルバイトは？学内以外でなんかやっているの？」

「え？いえ。特に何も・・・」

「よしっ！札幌まで出ないといけないから、少し通うのは大変だけど、いいアルバイトを紹介してあげますよぉ〜！これで、直人君のハートもがっちりつかめますっ！！！」

これで完璧ですっ！！

「えと・・・あの・・・アルバイトはそろそろしたいなあとは思ってたんですけど・・・直君のことは・・・」

「自信もちなつて。アルバイトしたら一緒にいる時間は少し減るけど、その分、ちょっと寂しくなったりして、奈央の存在が急に大事に思えてきた入りするかもよ。さらにアルバイト先で萌え萌えの格好なんてしてた日には・・・」

「そうでうよぉっ！絶対、チャンスはめぐって来ますよっ！！」

うーん、奈緒ちゃんテンションは上がりません。何でだろ
う・・・

「そういうんじゃないんです。直君は私のこと、そういう風に見れないんです。わかってるんです・・・」

あ、奈緒ちゃんの目に光るものが・・・いったい何があったんだ
ろ・・・

ども、再び島がお送りします。

東山が買ってきたもやしを早速調理して、『萌やし会』ははじまった。焼酎のナリン割りは結構利く。いい塩梅に新橋を除く三名は気持ちよくなってきた。

「でだ、なんなんだ？」

「はぁ……」

ノラリクラリとかわし続ける新橋。おのれ……俺たちを酔わして結局有耶無耶にするつもりか……

そうはさせじと一気にナポ酎を煽った俺が新橋に迫るっ！

「どう見たって、彩原がお前のことを好きだって言うのは分かっているんだよな？」

「いや、ですからあれは……幼馴染だからで……」

「おいおい、直人……円だって言ってたぞ……奈緒ちゃんはお前のことを……」

「俺と奈緒はそういつふうになれません……理由があります……」

理由……あるというのなら語ってもらおう……。

「じゃあ、そのあたりを教えてもらおうか？何があつたんだ？」

「……話は長くなりますが……」

「時間はたっぷりある」

口の重い新橋が語り始めた。子供の頃、物心付いたときから彩原と兄弟のように育ってきたと言ったところからだ……。

．．．．．
．．．．．
．．．．．長い．．．．．

すでに、新橋が話し始めてから二時間が経過している。だが、まだ話は小学校五年生までだ。俺達はそのまでの彼の生い立ちについて全部聞かされている感じだ。そして．．．気づくと焼酎とジュースのペットボトルが三本ほど転がっている。

．．．．．
．．．．．
．．．．．さらに一時間．．．

やっと中学に入るところまで話が進んできたが．．．東山と神林はすでに撃沈している。

「ああ、島さん．．．島さんもお疲れのようですね．．．ここらでお開きにしますか．．．」

やられた・・・まさかこんな作戦だったとは・・・。

「結局・・・何があったの？なんで、そんなに頑なの？」

奈緒の頑固な言い様に軽いいらだちを覚えた。ああ、ころころ語り手が代わってごめんなさい。円です。詩織さんはそろそろ限界のようなので、あとは私が。

「直君は自分では絶対に言わないと思うし・・・私の口からも言えないよ・・・ごめん・・・」
「奈緒・・・」

茶化す気にもなれない。奈緒の目からはきれいな水滴がこぼれ落ちてきている。

「奈緒ちゃんっ！」

突然、詩織さんが立ち上がったっ！

「そりゃあ、言えないこともあると思いますよあっ！でもあゝ、一人で悩んでばかりいちやだめですよっ！みんな仲間なんですからあっ！話したく鳴ったらいつでも話してね。辛いときは一人でいるもんじゃないよあゝ・・・ヒックウ・・・ふふ・・・へへ・・・ZZZ」

詩織さん撃沈・・・。

「ふう・・・まあ、言えないってんならしょうがないか・・・でも、私たちはいつだって奈緒の味方だからねっ！」

「ありがとう・・・。」

しかし・・・本人たちが語らないにも関わらず、数日後に私たちは真相を知ることになる・・・

恋愛の定義 その3（後書き）

詩織「なんだか今回のシリーズ・・・タイトルと内容があっっていないような・・・」

神林「詩織さん・・・たしかにそうなんですね・・・」

島「いいんだよ・・・作者はサブタイトルなんて真面目に考えてないから・・・」

すみません。最初はもうちょっと、直人と奈緒の話の突っ込んだところを書こうかと思ったんですが、次の展開を思いついたらここでそこまで書くわけに行かず・・・。

〈次話予告〉

「は、はじめまして。彩原奈緒です」

「あ、あれ？な、奈緒ちゃん？」

「え？」

「あら？綾乃ちゃん、奈緒ちゃんとお知り合いなんですかあ？」

〈お願い〉

お気に入り登録、ご評価、ご感想をお待ちしております。

厳しいご意見もドシドシお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4298o/>

Kらぼ

2011年10月6日14時19分発行